The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大阪大学・京都大学　公共圏における科学技術　活動報告2013
Author(s)	公共圏における科学技術・教育研究拠点
Citation	大阪大学・京都大学　公共圏における科学技術　活動報告2013. 2014, p. 1-89
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89249
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

科学技術イノベーション政策における
「政策のための科学」基盤的研究・人材育成拠点

大阪大学・京都大学

公共圏における科学技術

活動報告
2013

STiPS 公共圏における
科学技術・教育研究拠点（STiPS）
Program for Education and Research on
Science and Technology in Public Sphere [STiPS]

目次

はじめに：なぜ、今、「公共のための科学技術政策」が必要なのか 1

1. 教育プログラムの実施 5
- 大阪大学の取組 6
- 京都大学の取組 9
- 合同講義 13
- 阪大学生の声 15
- 京大学生の声 16

2. プログラム推進委員会の運営 19

3. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施 25
- 海外調査 26
- イベント情報 28

主催：社会のためのイノベーションに関するネットワーク構築に向けたワークショップ 28
共催：科学技術セミナー 32
共催：「シリーズ：適正技術」 34
共催：セミナー「適正技術と BOP ビジネス―バングラデシュとカンボジアの経験から」 37
共催：第 1 回 資源・エネルギー法研究会 「ドイツにおける原子力訴訟の日本法への示唆」 38
協力：「責任ある研究・イノベーションのための国際シンポジウム」 39
阪大拠点主催：「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会） 41
学生活動 48

- 東京大学等との共同学生調査 52

4. 関西ネットワークの発展 57
- ラボカフェ 58

5. 拠点間共同プログラムへの参画 63
- サマーキャンプの設計 64
- 共催：国際シンポジウム 2013 66

6. 政策のための科学に関連する活動 69

はじめに：なぜ、今、「公共のための科学技術政策」が必要なのか

「この論争は安全性に関するものではなく、どのような世界に生きたいと欲するかという、はるかに大きな問題に関するものである。」(Select Committee on Science and Technology 2000)

この一文は、英国で 90 年代末に過熱した遺伝子組換え作物（GM）論争の教訓として英国政府がまとめた報告書のものです。

現代社会における科学技術政策は、社会の駆動力としての科学技術のあり方を形成する重要な政策となっています。一方で当然のことながらその政策は、科学技術の研究者集団のための振興策に尽きるものではありません。この点は、科学技術政策を「社会及び公共のための政策」の一つと位置づけた第 4 期科学技術基本計画（平成 23 年）においても前提とされており、社会的課題に対応した科学技術政策の形成が必要とされています。つまり、これからの科学技術政策は「どのような世界に生きたいと欲するか」という問いに答えるものでなければならないのです。

また科学技術政策を進めるにあたっては、「客観的証拠（エビデンス）」に基づいた「政策のための科学」が整備されるべきであることは言うまでもありません。しかしそれと同時に、そのような「政策のための科学」が、ともすれば客観的証拠を論文引用数や経済指標など「定量化可能なデータ」に限定した営みになることも私たちは懸念しています。

英国の GM 論争の事例は、定量化可能なリスクに基づく安全性の説得という政策的対応が、問題の解決に至らなかったという反省を示しています。決定的に欠落していた視点は、世の中の人々が、科学技術や公共政策に何を期待し、何を懸念しているか、どのような世界に生きたいと欲しているのか、といった社会の期待と懸念を把握することであり、これは統計的世論調査のような定量的方法だけで把握することは困難です。そのために必要なのは、研究者コミュニティや産業界、政策立案者のみならず、一般の市民も含めた多様な人々や組織・集団が、直接・間接に議論し、熟慮を深め、自ら期待と懸念を顕在化し共有していく参加・関与・熟議のプロセスであると私たちは考えています。本拠点では、これを「科学技術への公共的関与 (public engagement)」と呼んでいます。

大阪大学および京都大学の連携による本人材育成拠点で重点を置くのは、「科学技術の倫理的・法的・社会的問題（ELSI）」に関する研究を基盤として公共的関与の活動と分析を行い、学問諸分野間ならびに学問と政策・社会の間を“つなぐ”ことを通じて政策形成に寄与できる人材、言い換えるならば「科学技術への公共的関与」を促進する人材の育成です。

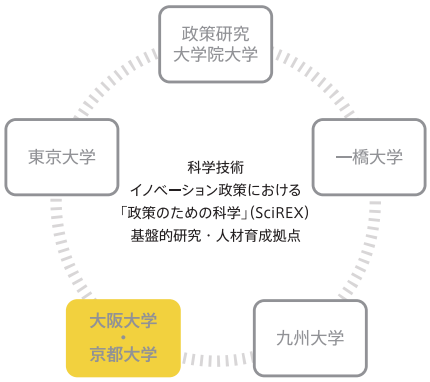
こうした公共的関与は、政策形成の初期の段階（アジェンダ形成段階）を含む各段階で、一般市民を含む多様なステークホルダーが参画・関与する公共的関与の活動と分析を行い、そこから社会的課題（期待や懸念、問題）を発見・特定し、政策や研究開発の立案・計画、テクノロジーアセスメントや社会的な合意形成等に反映させていく必要があります。そこで重要なのは、科学者・技術者の側が何を問題とし何をしたいかのみならず、社会の側が何を解決すべき問題と考え、科学技術に何を期待し、何を懸念しているかを把握することです。

そのためには、自分の専門分野の枠組みを超えて、広く俯瞰的・多角的に科学技術と社会の諸問題・課題を洞察・理解し、かつ公共的関与の活動と分析を行えるような知識とセンス、実践的な能力を備えた人材の育成が急務であると考えています。

STiPS 代表　小林傳司（大阪大学）

公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）について

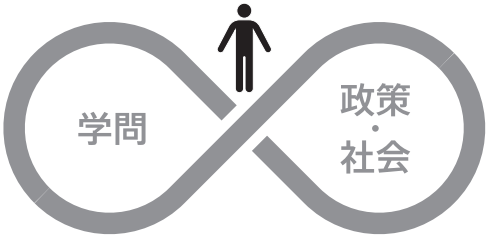
「公共圏における科学技術・教育研究拠点（Program for Education and Research on Science and Technology in Public Sphere : STiPS）」は、大阪大学および京都大学の連携による人材育成プログラムです。文部科学省の科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」推進事業の一環として、2012 年 1 月に発足しました。なお、同推進事業には 5 拠点が採択されており、有機的な拠点間連携を通した人材の育成を目指しています。



STiPS では、科学技術の倫理的・法的・社会的問題（ELSI）に関する研究と教育を行い、政策形成に寄与できる「政策のための科学」の人材育成を進めています。

教育拠点としての STiPS

STiPS では、科学技術や公共政策に対する社会の期待と懸念を把握するために、研究者コミュニティや産業界、政策立案者のみならず、一般の市民も含めた多様な人々や組織が、直接・間接に議論し、熟慮を深め、自ら期待と懸念を顕在化し共有していく参加・関与・熟議のプロセスが必要と考えています。



こうした「科学技術への公共的関与（public engagement）」に関する活動と教育を行うことにより、自分の専門分野の枠組みを超えて、多角的に科学技術と社会の諸問題を理解し、学問と政策・社会の間を“つなぐ”ことを通じて政策形成に寄与できる人材の育成を目指しています。

研究拠点としての STiPS

STiPS では、政策形成における公共的関与の活動と分析をより効果的にするために、大阪大学と京都大学の連携により、幅広く科学技術の研究現場の動向を踏まえつつ、科学技術の倫理的・法的・社会的問題（ELSI）に関する研究を行います。また ELSI に関する研究を基盤として、テクノロジーアセスメントなどの公共的関与の活動と分析を行うことにより、公共的関与に関する理論的かつ実践的な能力を備えた人材育成を進めています。

実践拠点としての STiPS

STiPS では、大学の知と社会の知をつなぐ「社学連携」の実践と、そこに学生が主体的に関与することも含めた教育を実施します。大阪大学・京都大学は、関西圏の経済界や地域行政との関わりも密接であり、科学技術を通じた連携・交流が極めて盛んです。これに加えて、一般市民や NGO/NPO など市民社会の公共的関与活動への参画を促進することにより、地域社会のニーズや事情、課題をより的確に反映した科学技術イノベーション政策や研究開発の立案・企画に貢献しています。

主要メンバー一覧（2014 年 3 月現在）

大阪大学			
小林 傳司	大阪大学コミュニケーションデザイン・センター	教授	科学哲学、科学技術社会論
星野 俊也	大阪大学大学院国際公共政策研究科	教授	国際関係論、国連研究、米国外交、国際安全保障論
山中 浩司	大阪大学大学院人間科学研究科	教授	科学社会学、医療社会史、医療社会学、技術社会学
加藤 和人	大阪大学大学院医学系研究科	教授	生命倫理、医学倫理、科学コミュニケーション論
瀬戸山 晃一	大阪大学未来戦略機構	特任教授	法と医療・生命倫理、法理学、法哲学、行動心理学的「法と経済学」
平川 秀幸	大阪大学コミュニケーションデザイン・センター	教授	科学技術社会論
八木 絵香	大阪大学コミュニケーションデザイン・センター	准教授	科学技術社会論、ヒューマンファクター研究
神里 達博	大阪大学コミュニケーションデザイン・センター	特任准教授	科学史、科学技術社会論
山内 保典	大阪大学コミュニケーションデザイン・センター	特任助教	認知心理学、科学技術社会論
辻田 俊哉	大阪大学コミュニケーションデザイン・センター	特任助教	国際政治学、国際安全保障論

京都大学			
川上 浩司	京都大学大学院医学研究科	教授	薬剤疫学
小寺 秀俊	京都大学大学院医学研究科	教授	マイクロTAS/MEMS
小山田 耕二	京都大学国際高等教育院	教授	可視化
久木元 伸如	京都大学学際融合教育研究推進センター	特定講師	ヒューマンインターフェース
瓜生原 葉子	京都大学学際融合教育研究推進センター	特定助教	医療経営学、人的資源管理

1. 教育プログラムの実施

1. 教育プログラムの実施

大阪大学の取組

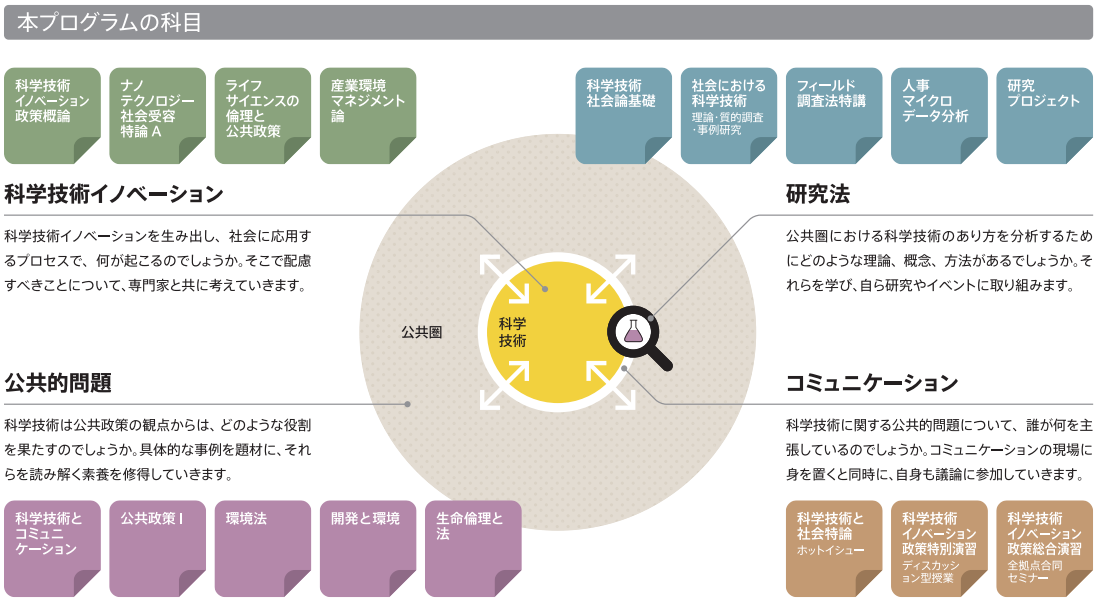
大阪大学　大学院副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」概要

STiPS では、科学技術の倫理的・法的・社会的問題（ELSI）に関する研究と教育を行い、政策形成に寄与できる「政策のための科学」の人材育成を進めています。大阪大学コミュニケーションデザイン・センター（CSCD）では STiPS の教育プログラムとして、2013 年 4 月より「公共圏における科学技術政策」という大学院副専攻プログラムを提供しています。

大学院副専攻プログラム制度は、大阪大学が平成 23 年度から始めたものです。これは、所属する研究科（主専攻）と異なる視点、学際的な視点、俯瞰的な視点といった複眼的視野の涵養のため、教育目標に沿って、主専攻に準ずるまとまりのある高度な専門的素養又は幅広い分野の素養を培うための大学院生に特化したプログラムです。プログラムに定める修了の要件を満たすことで、副専攻プログラム修了認定証が授与されます。副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」の修了には、必修科目 6 単位および選択科目 8 単位以上の計 14 単位以上の修得が必要です。

大学院副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」は、「科学技術の倫理的・法的・社会的問題（ELSI）」に関する研究を基盤として公共的関与の活動と分析を行い、学問諸分野間ならびに学問と政策・社会の間を“つなぐ”ことを通じて政策形成に寄与できる人材、言い換えるならば「科学技術への公共的関与」を促進する人材の育成を目指しています。自分の専門分野の枠組みを超えて、広く俯瞰的・多角的に科学技術と社会の諸問題・課題を洞察・理解し、かつ公共的関与の活動と分析を行えるような知識とセンス、実践的な能力を学ぶためのプログラムを用意しています。

キャリアパスとしては、主専攻の専門性を中心としつつ、さらに「政策のための科学」の素養を備えた人材として、大学、研究機関、企業などに就職することが想定されます。また、地方及び国の行政、政策秘書、シンクタンク、研究大学の研究戦略（research policy）担当者、様々なセクターのリスクコミュニケーション人材としての活躍も期待されます。



本副専攻プログラムは、全国 5 拠点（政策研究大学院大学、東京大学、一橋大学、大阪大学・京都大学、九州大学）合同の合宿セミナーを始め、他の「政策のための科学」拠点と連携して進めています。拠点間ネットワークを生かし、公共的関与や政策形成の現場とのつながりを、より一層強化できるように努めております。

大阪大学　大学院副専攻プログラムの運営状況

平成 25 年度大阪大学大学院副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」履修状況

・副専攻プログラム履修者数：15 名（男 12 名、女 3 名）

・学年内訳：M1（7 名）、M2（6 名）、D2（2 名）

・所属：理学（5 名）、基礎工学（3 名）、工学（2 名）、薬学（1 名）、生命機能（1 名）、法学（1 名）、文学（1 名）、人間科学（1 名）

（参考）大学院等高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」履修者数：8 名。（高度副プログラムは 8 単位（副専攻は 14 単位）で修了となる大阪大学のみのコースとなります。）

開講科目

科目カテゴリー		開講部局（課程）	授　業　科　目　名	主担当教員	単位	学期
入門必修科目（2単位）		CSCD（院）	科学技術イノベーション政策概論	神里達博ほか	2	1
連携必修科目（2単位）		CSCD（院）	科学技術イノベーション政策特別演習	八木絵香ほか	2	集中
必修科目（2単位）		CSCD（院）	研究プロジェクト	小林傳司ほか	2	通年
選択科目：8単位以上（選択科目Ⅰおよび Ⅱから、それぞれ2単位以上を履修）	選択科目Ⅰ：基軸科目群	CSCD（院）	科学技術とコミュニケーション	平川秀幸、八木絵香、神里達博ほか	2	1･2
		CSCD（院）	科学技術社会論基礎	小林傳司ほか	2	1
		CSCD（院）	科学技術イノベーション政策総合演習	小林傳司ほか	2	集中
		人間科学研究科（博士前期）	社会における科学技術特定演習	山中浩司、森田敦郎	2	2
		人間科学研究科（博士前期）	フィールド調査法特講	森田 敦郎、木村　自、宮原 暁	2	1
		国際公共政策研究科（博士前期）	公共政策Ⅰ	星野　俊也、多胡　圭一	2	2
	選択科目Ⅱ：イシュー科目群	CSCD（院）	科学技術と社会特論	平川秀幸、神里達博　ほか	2	2
		法学研究科（博士前期）	総合演習（生命倫理と法）	瀬戸山晃一	2	2
		法学研究科（博士後期）	特定研究（生命倫理と法）	瀬戸山晃一	2	2
		医学系研究科（博士前期）	ライフサイエンスの倫理と公共政策	加藤和人、吉澤剛	2	集中
		工学研究科（博士前期）	産業環境マネジメント論	東海　明宏	2	1
		基礎工学研究科（博士前期）（ナノサイエンスデザイン教育研究センター提供）	ナノテクノロジー社会受容特論A	伊藤　正	1	集中
		国際公共政策研究科（博士前期）	環境法	松本　充郎	2	1
		国際公共政策研究科（博士後期）	特殊研究（環境法）	松本　充郎	2	1
		国際公共政策研究科（博士前期）	特殊講義（開発と環境）	大槻　恒裕	2	2
		国際公共政策研究科（博士後期）	特殊研究（開発と環境）	大槻　恒裕	2	2
		国際公共政策研究科（博士前期）	特殊講義（人事マイクロデータ分析1）	松繁　寿和	2	通年
		国際公共政策研究科（博士後期）	特殊研究（人事マイクロデータ分析3）	松繁　寿和	2	通年

大阪大学　特色ある授業

「科学技術イノベーション政策概論」（1 学期、2 単位）

本講義では毎回、各界で活躍するフロントランナーをゲストとして招き、科学技術イノベーションが、社会にとってより良いものとして展開していくための諸条件について、講義とディスカッションを通じて立体的に学んでいきます。これらにより、科学技術イノベーション政策を考える基礎としての政策過程の実際や、国内外の政策や実践の動向、またイノベーション論の関連分野についての基礎的知識、さらには社会の側のメッセージを科学技術の現場にいかにして伝えるかなど、イノベーションをめぐる広範な論点について、理解を深めます。

2013 年度のゲスト講師からは、「科学技術政策論」、「レギュラトリーサイエンス論」、「ユニバーサルデザイン論」、「医療イノベーション論」、「産学連携論」、「環境イノベーション論」をテーマに、ご講演を頂きました。

「科学技術と社会特論」（2 学期、2 単位）

現代社会における科学技術は、多大な恩恵をもたらすとともに、環境や人間の健康に対するリスクや倫理的問題などをめぐって、しばしば社会的な論争の的になります。そこで争われるのは、「何が真実か」という事実関係だけではありません。そもそも何が「問題」なのか、誰のどういう問題であり、どのような解決が望ましいのかといった、立場や価値観の違いにもとづく「問題のフレーム」の対立もあります。政府や専門家に対する「不信」という問題も根深いです。これが、3．11 の東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故以降、より我々の社会で顕在化しているのは周知の通りです。

こうした科学技術をめぐる社会的対立の複雑なあり方を理解することは、科学技術イノベーション政策の立案や研究開発、社会の多様な立場をつなぐコミュニケーション実践を進めるうえで欠かせません。そのために本講義では、現在、社会的な論争が生じている科学技術の問題（ホットイシュー）を二つ取り上げ、それぞれについて「賛成派」「反対派」といった対立する立場の二人の論客を講師として招き、講義を受けたうえで、受講生および担当教員の間で討論を行います。2013 年度は、「原子力発電」「遺伝子組換え作物」を題材にしました。

京都大学の取組

京都大学　学際融合教育研究推進センター　「政策のための科学ユニット」概要

「さまざまな分野を“つなぐ”人材」の育成

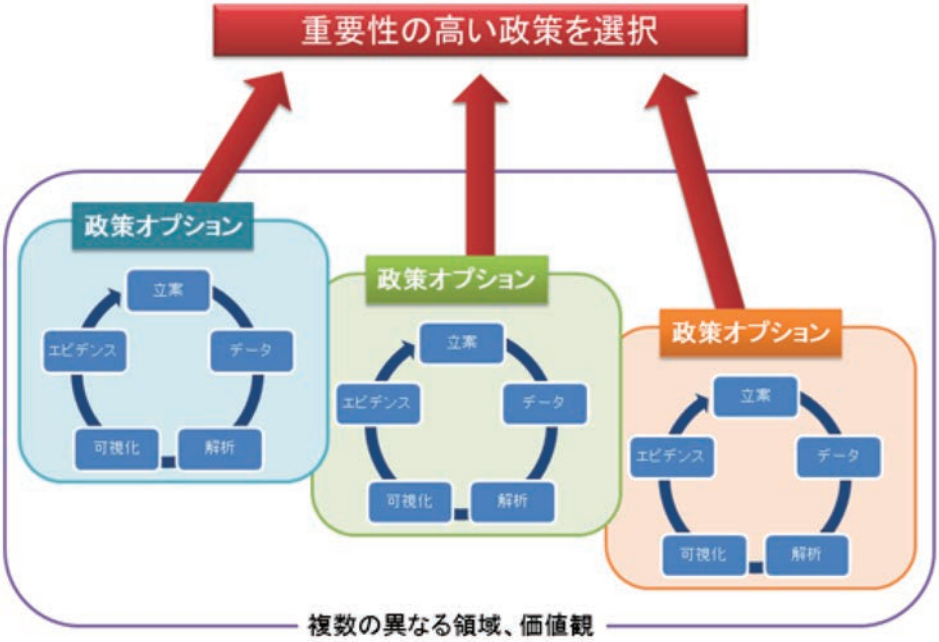
第 4 期科学技術基本計画が掲げる「社会及び公共のための政策」「社会とともに創り進める政策」としての科学技術イノベーション政策の形成のためには、科学技術や公共政策に対する社会の期待・懸念・問題認識を把握し、反映させていくことが求められています。そのためには、定量的なエビデンスに加え、社会の多様な主体による熟議（対話と熟慮）をふくむ**「科学技術への公共的関与（public engagement）」**や「科学技術の倫理的・法的・社会的問題（ELSI）」研究が生み出すエビデンスが不可欠です。この認識のもと、平成 25 年度から本学の大学院生に対して開講する人材育成プログラムでは、**科学技術の倫理的・法的・社会的問題（ELSI）に関する研究を基盤として公共的関与の活動と分析を行い、学問諸分野間ならびに学問と政策・社会の間を“つなぐ”ことを通じて政策形成に寄与できる人材**の育成を目指します。

2 種類の「つなぐ人材」：

1. 異分野・異領域の「間」に立って橋渡しをする「媒介者」としてのつなぐ人材
2. 個別分野の研究を行いつつ、その分野と他分野・他業種・市民等をつなぐ人材

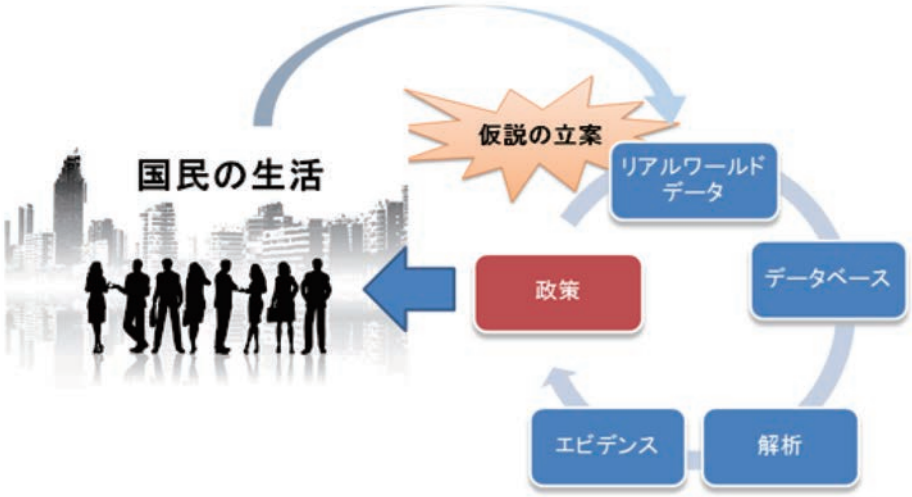
修了後のキャリアパスとしては、各種研究職、行政職、政策秘書、シンクタンク職員、大学の研究戦略担当、リスクコミュニケーション人材などを想定しています。

研究においては、政策を実施すべき各分野において、何を仮説として設定するのか、また、複数の異なる領域、価値観から、どのように優先順位をつけて予算配分をするのかといった問題は重要なテーマです。



定量的なエビデンスにおいては、実世界における各種のデータを可視化し、そこから様々な手法で解析評価をする手法の深化も重要です。

医療分野を例にとると、ヘルステクノロジーアセスメント（Health Technology Assessment; HTA）は、医療の質を評価して実行する EBM（Evidence-based medicine）、EBM を実施するなかで、つぎにその費用対効果を評価する比較効用分析（Comparative Effectiveness Research; CER）を内包しています。いずれもその研究手法は、疫学、生物統計学、行動科学といった科学にもとづいています。1990 年代後半から、欧州、米国、アジア諸国において、各国政府に HTA を実践する独立機関が設立されました。昨今、米国においては、HTA 機関である健康研究評価庁（Agency for Healthcare Research and Quality; AHRQ）のみならず、医薬品等の許認可によってレギュラトリーサイエンスを実践する食品医薬品庁（Food and Drug Administration; FDA）も CER の重要性を訴えるようになっています。一方、日本においては、まだ HTA の組織的研究は萌芽的であり、政府機関も存在していません。さて、HTA においては、EBM のためのエビデンス構築のためには、ある治療法等を介入として使用した質の高い臨床データを収集し、系統レビューを実施、そして各種データのメタ解析をおこないます。そこで、当該治療法がどの患者のどのような状況で有用なのかを評価し、そこで得られた仮設をもとに当該治療法を介入とした新規の臨床研究計画を策定し、ランダム化比較試験（RCT）を実施します。それらの集積によりエビデンスレベルの高い結論が得られていきます。さらに、エビデンスに基づいた医療が実践されるなかで、たとえば、二つの異なる治療法が存在し安全性・有効性が等しい場合、どちらがある疾患の治療に対して費用対効果が良いのかを評価するために、臨床状態を反映したマルコフ推移モデルを設定し、モンテカルロシュミレーションのような疫学、生物統計学的手法を用いて、CER を実施します。このように実世界のデータからエビデンスへ、エビデンスから政策へ、そして政策を実施したのちにそれを評価していくというサイクルが形成されていくことになります。



健康、医療分野においては、このような系統的な手順が、HTA として科学に基づいた行政施策として発展を遂げつつあります。重要な科学技術分野であるエネルギー、環境、農業、食品、工学、宇宙などのテクノロジーアセスメント（TA）においてもこのような手法は有用と考えられ、様々な分野においてこのような研究を実施していくことは、政策のための科学として大変重要と考えられます。

さらに、私たちは、さまざまな学際領域の研究者同士が議論し、定量的研究、定性的研究と組み合わせて新しい学問を開拓していくことを目指したいと考えています。

京都大学　「政策のための科学ユニット」運営状況

平成 25 年度京都大学「政策のための科学ユニット」履修状況

・政策のための科学ユニット履修者数：9 名（男 5 名、女 4 名）

・学年内訳：D3 名、M6 名

・所属：医学研究科 4 名、人間・環境学研究科 2 名、工学研究科 1 名、農学研究科 1 名、経営管理大学院 1 名

開講科目

区分		科目名	期間		主担当教員（研究科）	単位	備考
			前期	後期			
入門必修科目		現代社会と科学技術		○	川上教授ら（医学研究科）	2	新規
連携必修科目		科学技術イノベーション政策特別演習	夏期集中		川上教授ら（医学研究科）	2	豊中
必修科目		研究プロジェクト	通年		川上教授ら（医学研究科）	2	新規
選択科目（８単位以上）	選択科目Ⅰ：基軸科目群（１科目以上選択）	現代社会と科学技術入門	○		川上教授ら（医学研究科）	1	新規
		科学技術イノベーション政策総合演習	夏期集中		川上教授ら（医学研究科）	2	課外
		研究の世界Ａ＜研究リテラシー入門コース＞	○		小山田教授（高等教育研究開発推進機構）	2	
		医薬品政策・行政		○	川上教授（医学研究科）	1	
		問題解決思考		○	末松教授（経営管理大学院）	2	
		疫学	○		中山教授（医学研究科）	2	
		公共政策論ＩＢ		○	佐野准教授（人間・環境学研究科）	2	
	選択科目Ⅱ：イシュー科目群（１科目以上選択）	可視化シミュレーション学		○	小山田教授（高等教育研究開発推進機構）	2	
		医薬品の開発と評価		○	川上教授（医学研究科）	1	
		研究の世界Ｂ＜研究リテラシー入門コース＞		○	小山田教授（高等教育研究開発推進機構）	2	
		応用経済学		○	依田教授（経済学研究科）	2	
		社会行動演習２		○	ベッカー教授（こころの未来研究センター）	2	
		健康情報学		○	中山教授（医学研究科）	2	
		文献評価法	○		中山教授（医学研究科）	1	
		比較農業食料組織経営論	通年		新山教授（農学研究科）	4	
		食品安全学Ⅱ	○		新山教授（農学研究科）	2	
		技術倫理と技術経営	○		椹木教授ら（工学研究科）	2	
		医療経済学A	○		後藤准教授（白眉センター）	2	
		共生社会環境論演習３Ｂ		○	佐野准教授（人間・環境学研究科）	2	

京都大学　特色ある授業

「現代社会と科学技術入門」（前期、1 単位）・「現代社会と科学技術」（後期、2 単位）

京都大学の政策ための科学プログラムでは科学と社会、政策とを「つなぐ人材」の養成を目標としています。この目的のために、「現代社会と科学技術入門」と「現代社会と科学技術」は各回毎に様々な関連トピックを取り上げて、学内外からの講師による話題提供と、それに基づいた学生間のディスカッションを行い、科学の多様性と社会、政策を考えるための端緒とします。

2013 年度の「現代社会と科学技術入門」と「現代社会と科学技術」は各回下記のテーマに従って話題提供と学生同士によるディスカッションを行いました。

「現代社会と科学技術入門」

第 1 回 オリエンテーションおよび医薬政策　川上浩司　教授
第 2 回 大学における学問とは？　分野融合・越境のダイナミクス 宮野公樹 准教授
第 3 回 科学的手法について　小山田耕二 教授
第 4 回 震災現場から学ぶ防災と情報通信　井澤一朗 教授
第 5 回 リスクコミュニケーション　富田直秀 教授
第 6 回 計量書誌学と科学・技術政策　仙石慎太郎 准教授
第 7 回 疫学とゲノム科学から社会基盤を考える　中山健夫 教授
第 8 回 現代の医療技術が起こす倫理問題とその政策　カール・ベッカー 教授
第 9 回 科学技術の社会への実装　全教員・学生によるディスカッション

「現代社会と科学技術」

第 1 回 意思決定と不確実性　小林傅司　教授：大阪大学コミュニケーションデザイン・センター
第 2 回 データの可視化を政策へ　小山田耕二 教授
第 3 回 ライフサイエンス研究の倫理とガバナンス　加藤和人　教授：大阪大学大学院医学研究科
第 4 回 科学・技術に対するガバナンス　佐野亘 准教授
第 5 回 生命科学を「規制」する？政策としての生命倫理　位田隆一教授：同志社大学グローバルスタディーズ研究科
第 6 回 大学の基礎研究と企業連携　小寺秀俊 教授
第 7 回 宇宙政策を考える　横田真　特任教授
第 8 回 技術の質の評価　富田直秀 教授
第 9 回 トランザクション・コストと経済政策　末松千尋 教授
第 10 回 医療費の増加と医療技術評価　後藤励 准教授
第 11 回 「政策のための科学」の計量書誌学データ分析　依田高典 教授
第 12 回 食品のリスクアナライシスとレギュラトリーサイエンス　新山陽子 教授
第 13 回 幹細胞とイノベーション　仙石慎太郎 准教授
第 14 回 クリティカル・シンキングの観点からみた科学技術と社会　伊勢田哲治 准教授
第 15 回 移植医療の社会的価値　瓜生原葉子　特定助教

合同講義

「科学技術イノベーション政策特別演習」（集中、2 単位）

2013 年 8 月 29 日、8 月 30 日、9 月 5 日、9 月 6 日の 4 日間、大阪大学と京都大学合同で「科学技術イノベーション政策特別演習」を実施しました。

近年では脳死臓器移植をはじめとする生命技術や遺伝子組み換え技術、BSE 問題など多種多様な課題において、先端科学技術と社会の関係に円滑さを欠く事態となりつつあります。これに対しては、国内では講演会の実施やわかりやすいパンフレットの作成等のいわゆる PA（Public Acceptance）活動が行われてきましたが、その有効性が限定的であり、「科学技術と社会の新たな関係構築」が必要であることが強く認識されつつあります。本演習では、研究の細分化により生じている専門家間のコミュニケーションの困難さを実感させることを目的とします。異なる研究科の学生による、具体的な科学技術的テーマをめぐる相互討論を行い、ディスカッションを通じて、課題となる科学技術と社会のかかわりについて理解し、具体的な議論手法を身につけることを目指します。2013 年度は、高レベル放射性廃棄物をテーマにしました。高レベル放射性廃棄物の取り扱い方について議論や提案をした後、この問題に対して自分が一専門家としてどのような貢献が可能かについて発表をしました。

「科学技術イノベーション政策総合演習（サマーキャンプ）」（集中、2 単位）

2013 年 8 月 23 日－25 日に、科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」推進事業（SciREX）の一環として、「科学技術イノベーション政策における『政策のための科学』基盤的研究・人材育成拠点 2013 年度サマーキャンプ」がオークラフロンティアホテルつくばで行われました。大阪大学からは学生 7 名、教員 3 名が参加しました。京都大学からは、学生 6 名、教員 5 名が参加しました。

阪大・京大間の講師の相互派遣

実質的な教育における協力として講師の相互派遣を行いました。大阪大学の入門必修科目「科学技術イノベーション政策概論」において、京都大学の川上浩司教授、仙石慎太郎准教授が講師を務め、京都大学の入門必修科目「現代社会と科学技術」において、大阪大学の小林傳司教授、加藤和人教授が講師を務めました。

阪大学生の声

「考え方の癖」を知る／小森駿介さん （工学研究科ビジネスエンジニアリング専攻 M2）

就活が早めに終わり、何か面白いことないかなと探していて、STiPS の副専攻を見つけました。研究そのものよりも、研究で得た技術を「どう生かすか？」という方向に興味があったので、これは自分と合っているかもしれないなと感じ、履修を決めました。実際に参加してみると、社会人の方が履修していたり、講師の方々がなかなか普段ではお話を伺うことができない方々であったりして、どんどん自分の世界が広がっていくなという感覚を持ちました。

STiPS で先生方がおっしゃっていることの一つとして、「考え方の癖を知ろう」ということがあります。何らかの問題を考えるときの筋道の立て方として、私のような工学を背景に持つ人には「どうやって目的に達成していくか」という「ロジックこそ正義」みたいな考え方があるように感じるのですが、STiPS の受講生と議論していると、「倫理観」というような切り口を持つ人もいたりして、今まで無かった視点を得ることができます。自分の中に新しい軸が増えた、という感じを持っています。

科学を魅力的に伝える仕事を／奥西亮太さん （理学研究科生物科学専攻 M2）

僕は大学 4 回生くらいまでは研究者になりたかったのですが、3.11 があり、様々な場面で科学者とそれ以外の人々のコミュニケーションのギャップを目の当たりにし、考えが変わってきました。そんな時に小林先生の「白熱教室」を見て、それがきっかけで STiPS を受講しようと思いました。小林先生が「この議論は科学に関するものではなくて、我々がどんな社会に生きたいかということに関する議論だ」とおっしゃっていて、それが非常に印象的でした。

最初は社会が科学を知らないことが課題だと考えていたのですが、小林先生の授業を受けているうちに、科学者で外に出て表現したいと思っている人をサポートするようなことがしたいと考えるようになりました。就職活動においても、そういった自分の思いや、そのために STiPS のような場で学んでいるということを話してきました。最終的にマスメディア（テレビ局）に就職することが決まりましたので、将来はそういったプラットフォームとなりうるようなテレビ番組を作りたいと考えています。

「自分が常識だと思っていることが意外と通じない」を肝に銘じる／鈴木麻由さん （理学研究科宇宙地球科学専攻 M1）

STiPS の授業で非常に印象的だったことは、市民団体の中で原子力発電と向き合っている方々を 2、3 人お招きして、私たちの発表に対してコメントを頂いた時のことです。受講生の中に「エビデンスベースで話すことが重要だ」とおっしゃる方がいて、その方が発表の直前まで「絶対に市民団体の人と話が

合わないと思う」とおっしゃっていたのです。でも実際に市民団体の方と質疑応答などをしているうちに、その方が「僕は市民団体の人と一番気が合うような気がする」とおっしゃるようになってきたのです。もともとその方が持っていた「市民団体」というイメージと実際が違っていて、例えば「エビデンスベース」というような、共通するような考え方が実際に話す中で感じられたのだろうなと思いました。

私も、STiPS で様々な方と議論する中で、科学を志している人同士なのにこれほど言葉が通じないのか、という驚きを感じました。普段「当然だよね」と言語化もせずに済ませていたことが実は当然でないということに気付くことができました。

京大学生の声

全体を俯瞰するバランス感覚を／橋本伸二さん（人間・環境学研究科 M1）

「学問・社会には無意味な対立が多く存在しているのではないか」、「社会課題が複雑化し、価値観が多様化している今、異分野を融合することで新たな価値を創造できるのではないか」、そんな考えを持って STiPS に参加してきました。

STiPS では、あらゆる分野から先生や学生が集まっており、他分野の幅広い知識に触れることができる上、他分野の学生と議論を重ねることで自分のスタンスに改めて気づかされました。また、コミュニケーションのズレを経験したことから、議論の目的を共有し、暗黙の前提を明示化することで、言葉や価値観、問題のフレーミングに対する相違をお互いが認識でき、建設的な議論につながると実感しました。つまり、異分野をつなげる仲介者の役割を果たすためには、幅広い知識を持っているだけでなく、全体を俯瞰し、問題の構造を正しく捉えるバランス感覚を備えることで、双方向のコミュニケーションを促すことが重要であると感じました。

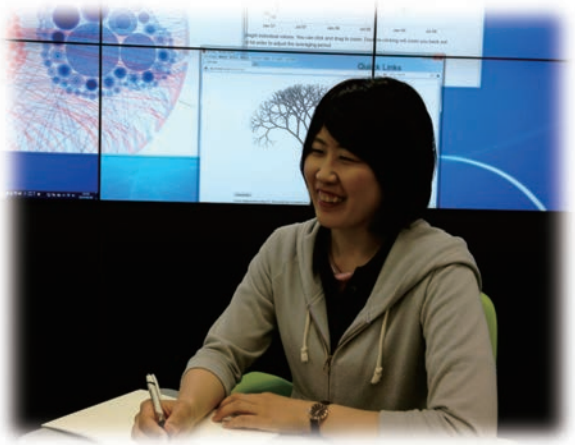
阪大との合同演習、全国の各拠点が集まったサマーキャンプが、さらに幅広い他分野との議論の機会を提供してくれました。このような機会も含めて、STiPS での学びが今の自分に影響し、「つなぐ人材」に向けて成長できていると思います。

現場の想いを政策提言へ変換する／錦織達人さん（医学研究科消化管外科 D2）

政策と現場の想いとの解離は、しばしば指摘されます。私は大学院進学前、消化器外科の臨床医として医療の現場にいました。臨床的な研究を行いたいと入学した大学院の説明会で、「政策のための科学」のフライヤーが目に留まりました。そこには「個別分野の研究を行いつつ、その分野と他分野・他業種・市民等をつなぐことを通じて政策形成に寄与する」という旨が書かれていました。その頃、外科医療の

効率性や資源利用といった問題にも想うところがありましたが、まして政策となると外科医とは程遠い領域であると感じていました。しかし、考えていた想いを何か形に出来るかもしれないと、本ユニットに応募しました。そして、その何かは、農学、工学、文学、経済学といった専門家や政策形成者による講義や実習、様々な分野の院生とのディスカッションから教えを得ることで拡がり、言葉として説明することで具現化されていきました。まだ自らの研究は動き始めたばかりですが、「政策のための科学」は、現場の想いが分野横断的なアカデミアの「知」とつながることで、政策提言の次元に変換される可能性を感じています。

異分野の人を「つなぐ」には／横井郁（人間・環境学研究科共生人間学専攻 M1）



私は文系・理系問わず幅広く知識を身につけられる「総合人間学部」という学部の出身です。そんな学部にいても、ある研究を他の研究分野とつなげることは難しいと感じていたため、「さまざまな分野をつなぐ人材を育成する」STiPS に関心を持ちました。

このプログラムでは様々な研究科が授業を提供しています。工学研究科提供のある授業を取った時の話ですが、周りが全員工学研究科の学生で、私が「いわゆる異分野融合」に関心を持っていると話すととても珍しがられたのです。この瞬間、「異分野融合に興味がある人間はここでは少数なのだ」ということに気づきました。逆に工学の分野における「リスク」の捉え方に初めは違和感があったことを覚えています。STiPS に参加しているメンバーで議論していても、同じ言葉でも使い方や意味が微妙に違って会話が食い違ってきた、ということもありました。背景が異なる人の考えを理解しコミュニケーションを成立させること、これが複数の分野を「つなぐ」第一歩だと感じています。

2. プログラム推進委員会の運営

2. プログラム推進委員会の運営

プログラム推進委員会

プログラム実施初年度では、大阪大学と京都大学の参画教員で構成されるプログラム推進委員会を計 4 回（6 月 12 日、10 月 3 日、11 月 27 日、3 月 26 日）実施しました。両大学における教育プログラムの進捗状況を共有するとともに、単位の相互認定に関する協定書に基づく特別聴講学生の受入れ手順などの運営に関する詳細の確認、拠点間合同事業に関する調整（出版事業、サマーキャンプ等）を行いました。また、学生の要望等を確認し合い、来年度の連携授業に関する議論など、次年度に向けたカリキュラムの発展について検討を行いました。

カリキュラムの発展及び拡充

単位の相互認定に関する協定書の締結

2013 年 3 月 27 日に「科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」推進事業「公共圏における科学技術・教育研究拠点」教育プログラム実施に伴う大阪大学と京都大学との間における単位の相互認定に関する協定書および覚書」を両大学の総長名で締結しました。2013 年度より、この協定に基づき、受入大学の指定する授業科目の履修及び単位の修得を学生が希望するときは、当該授業科目の履修及び単位の修得ができるようになっています。

また、次年度のカリキュラム拡充に向けては、科目追加の検討を行いました。平成 26 年度より、大阪大学では 9 科目、京都大学では 1 科目追加することとなりました。これに伴い、大阪大学の教育プログラムでは、実施及び連携部局が 9 部局（CSCD、人間科学研究科、法学研究科、医学系研究科、工学研究科、基礎工学研究科、国際公共政策研究科、グローバルコラボレーションセンター、全学教育推進機構）に増えました。

大阪大学定例ミーティング

原則として毎週水曜日の午前中に、主たるメンバーの STiPS に関する定例会議を行いました。運営に関わる意思決定全般、プログラム全体や新設科目のカリキュラム開発、科学技術政策に関する海外大学の教育プログラムの動向や学内における研究動向に関する情報共有など内容は多岐にわたりました。

京都大学定例ミーティング

参画教員を中心に構成される「実務者委員会」を計 5 回（4/12、5/8、9/10、12/11、1/30）開催し、運営に関わる意思決定全般及び、カリキュラムの改善案を検討しました。

教科書作成の企画

「政策のための科学」（SciREX）の出版物編集委員会の動きに合わせ、STiPSの参画教員を中心に、『公共圏における科学技術イノベーション政策』と題する教科書作成の検討を始めました。また、大阪大学、京都大学、それぞれの拠点や連携拠点としての特色と強みを活かした章割り案について検討を行い、「科

学技術知の変容」、「リスクの顕在化」、「ELSIとライフサイエンス」、「公共圏の立場からみるエネルギー問題」、「EBMとTA」、「科学技術への公共的関与」、「公共圏における科学技術イノベーション政策」の研究テーマが提案されました。

研究会やイベント開催の企画及び調整

ここでは実施イベント一覧を示します。各イベントについては、3 節及び 4 節を参照して下さい。

名称	日時	場所	主催等
社会のためのイノベーションに関するネットワーク構築に向けたワークショップ	2014 年 1 月 31 日	グランフロント大阪	主催：STiPS
科学技術セミナー			
【第 2 回科学技術セミナー】 文献データを使った「大学の評価」とその意味（調麻佐志／東京工業大学理工学研究科）	2013 年 5 月 24 日	大阪大学銀杏会館	主催：大阪大学大型教育研究プロジェクト支援室 共催：STiPS
【第 3 回科学技術セミナー】 民間助成財団とはなにか、研究者はどのように活用すればよいのか（渡辺元／公益財団法人　助成財団センター）	2013 年 7 月 31 日	大阪大学銀杏会館	主催：大阪大学大型教育研究プロジェクト支援室 共催：STiPS
【第 4 回科学技術セミナー】 EU の科学技術戦略と日欧連携（市岡利康／日欧産業協力センター）	2013 年 10 月 25 日	大阪大学テクノアライアンス棟	主催：大阪大学大型教育研究プロジェクト支援室 共催：STiPS
【第 5 回科学技術セミナー】 科学技術基本法制定および科学技術基本計画について（吉澤剛／大阪大学医学系研究科） 科学技術政策の中で求められる大学の役割（有本建男／政策研究大学院大学・JST 研究開発戦略センター）	2014 年 1 月 29 日	大阪大学テクノアライアンス棟	主催：大阪大学大型教育研究プロジェクト支援室 共催：STiPS
シリーズ「適正技術」			
「シリーズ：適正技術」第 1 回ワークショップ 「Design for Life—地域が変わるものづくり」	2013 年 10 月 11 日	大阪大学ステューデント・コモンズ	主催：CSCD 共催：STiPS、GLOCOL、OSIPP 稲盛財団寄附講座、NPO 法人ミラツク
「シリーズ：適正技術」第 2 回ワークショップ 「Design for Life—地域が変わるものづくり」	2013 年 11 月 21 日	大阪大学 e-square	主催：CSCD 共催：STiPS、GLOCOL、OSIPP 稲盛財団寄附講座、NPO 法人ミラツク 協力：21 世紀懐徳堂

「シリーズ：適正技術」第 3 回ワークショップ「Design for Life－地域が変わるものづくり」	2013 年 12 月 19 日	大阪大学ステューデント・コモンズ	主催：CSCD 共催：STiPS、GLOCOL、OSIPP 稲盛財団寄附講座、NPO 法人ミラツク 協力：21 世紀懐徳堂
「シリーズ：適正技術」Fieldwork & Design Session「Design for Life－地域が変わるものづくり」	2014 年 2 月 23 日－24 日	滋賀県高島市朽木麻生森林公園くつきの森	主催：CSCD 共催：STiPS、GLOCOL、OSIPP 稲盛財団寄附講座、NPO 法人ミラツク 協力：特定非営利活動法人 結びめ
セミナー「適正技術と BOP ビジネス―バングラデシュとカンボジアの経験から」	2013 年 11 月 16 日	大阪大学ステューデント・コモンズ	主催：CSCD 共催：STiPS、学際融合教育研究センター 協力：21 世紀懐徳堂
その他、共催／協力イベント			
第 1 回 資源・エネルギー法研究会「ドイツにおける原子力訴訟の日本法への示唆」（赤間聡／高知大学人文学部）	2014 年 3 月 26 日	大阪大学国際公共政策研究科	主催：資源・エネルギー法研究会 共催：STiPS、タイガー
責任ある研究・イノベーションのための国際シンポジウム	2013 年 12 月 16 日	大阪大学銀杏会館	主催：大阪大学大学院医学系研究科医の倫理と公共政策学教室 共催：文部科学省科学研究費新学術領域研究「ゲノム支援」 協力：STiPS
「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）			
【第 1 回 STiPS Handai 研究会】「政策のための科学」教育プログラムに関する九州大学の取組について（永田晃也／九州大学大学院 経済学研究院）	2013 年 5 月 29 日	大阪大学ステューデント・コモンズ	主催：STiPS（阪大）
【第 2 回 STiPS Handai 研究会】Thinking after Fukushima（アラン＝マルク・リュー／リヨン第三大学)	2013 年 6 月 27 日	大阪大学ステューデント・コモンズ	主催：STiPS（阪大）

【第 3 回 STiPS Handai 研究会】 技術の文化と価値の文化をつなぐ計画の可能性（小浦久子／大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻）	2013 年 7 月 31 日	大阪大学ステューデント・コモンズ	主催：STiPS（阪大）
【第 4 回 STiPS Handai 研究会】 Innovation+Regulation+Communication: Responsible Innovation Triangle（平川秀幸／大阪大学コミュニケーションデザイン・センター）	2013 年 9 月 25 日	大阪大学ステューデント・コモンズ	主催：STiPS（阪大）
【第 5 回 STiPS Handai 研究会】 希少疾患と医療と社会：SORD との共同調査から（山中浩司／大阪大学大学院 人間科学研究科人間科学専攻）	2013 年 10 月 23 日	大阪大学ステューデント・コモンズ	主催：STiPS（阪大）
【第 6 回 STiPS Handai 研究会】 研究シーズと持続可能社会ビジョンの結節点：メゾレベル研究の方法論と実践（原圭史郎／大阪大学環境イノベーションデザインセンター）	2013 年 11 月 20 日	大阪大学ステューデント・コモンズ	主催：STiPS（阪大）
【第 7 回 STiPS Handai 研究会】 原子力リスク規制の再構築に向けて（松本充郎／大阪大学大学院国際公共政策研究科）	2013 年 12 月 18 日	大阪大学ステューデント・コモンズ	主催：STiPS（阪大）
【第 8 回 STiPS Handai 研究会】 日本の食品問題において消費者の不安感に影響を与える要素の考察（小森駿介／STiPS 受講生） 多メディア時代の科学技術ジャーナリズム：「翻訳」、「批判」から「構築」へ（奥西亮太／STiPS 受講生）	2014 年 2 月 19 日	大阪大学ステューデント・コモンズ	主催：STiPS（阪大）
ラボカフェ			
「シリーズ：科学技術イノベーション」第 6 回 サステナビリティとイノベーション（梅田靖／大阪大学工学系研究科兼 CEIDS）	2013 年 6 月 20 日	アートエリア B1	主催：STiPS
「シリーズ：科学技術イノベーション」第 7 回 ソーシャル・イノベーション（今里滋／同志社大学政策学部・大学院総合政策科学研究科）	2013 年 8 月 8 日	アートエリア B1	主催：STiPS
「シリーズ：科学技術イノベーション」第 8 回 生命科学のイノベーション（八代嘉美／京都大学 iPS 細胞研究所 上廣倫理研究部門）	2013 年 10 月 24 日	アートエリア B1	主催：STiPS
「シリーズ：科学技術イノベーション」第 9 回 電子書籍のアクセシビリティ：バリアフリーのためのイノベーション（松原洋子／立命館大学）	2013 年 11 月 22 日	アートエリア B1	主催：STiPS

3. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施

3. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施

海外調査

公共的関与に関わる基盤的研究の発展に向け、海外大学との連携を視野に入れた海外調査として、11月にミュンヘンにおいて、ミュンヘン工科大学ミュンヘン社会技術センターのセンター長へのインタビューを実施し、本研究に関する教育プログラムの発展や STiPS との連携方法について意見交換を行いました。

また、研究成果や授業開発に関する情報収集のための主な海外調査として、9 月にアトランタで開催された、"2013 Atlanta Conference on Science and Innovation Policy"に参加し、各セッションの議論に参加して情報収集を行うとともに、懇親会において諸外国の科学技術政策の状況について突っ込んだ意見交換を行いました。11 月にミュンヘンで開催された「技術と社会の統合による教養教育」と題するシンポジウムにおいては、科学技術社会論等に関する研究発表並びに討議を行いました。3 月、Technopolis（メヘレン／ベルギー）で開催された、SCIENCE CENTER WORLD SUMMIT 2014 に参加し、世界各国のサイエンスセンターが進めている科学へのパブリック・エンゲージメントの実践事例に関する情報収集を行いました。また同月、イギリスのオックスフォードマーティンスクール、センスアバウトサイエンス、サセックス大学の関係者にインタビューを行い、「政策のための科学」に関する先進的な取り組みについて情報収集を行いました。以下に概略を示します。

○シンポジウム「技術と社会の統合による教養教育」およびインタビュー調査（ドイツ）

2013 年 11 月 4 日～8 日、ミュンヘン工科大学に調査訪問を行いました（小林傳司教授）。まず、同大学において開催された第 10 回シンポジウム「技術と社会の統合による教養教育」に参加し、「知の構造転換と大学の役割」と題する報告を行った他、主にドイツにおける科学技術政策や科学技術教育に関する取り組みについて、活発な意見交換を行いました。加えて、レジデンス内アカテヒ事務局において、ミュンヘン工科大学ミュンヘン社会技術センター（以下、MCTS）のセンター長である Klaus Mainzer ミュンヘン工科大学教授にインタビュー調査を行い、MCTS の設立経緯と特徴について知見を得ました。MCTS は、科学、技術、社会をインターフェースするという点で、科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」推進事業「公共圏における科学技術・教育研究拠点」の教育プログラムと共通する点が多くあります。本年度の「公共圏における科学技術・教育研究拠点」の教育プログラムに MCTS の取り組み等を反映すべく、独語の MCTS のシラバスを翻訳し、MCTS のカリキュラムは精査済です。また、社会とのコミュニケーションに関する研究と教育を進める MCTS とは、今後、教育研究面での連携を深めていくことで協議を開始しました。連携の具体的な案として、本教育プログラム履修生の派遣と、MCTS が提供する教育プログラムの履修生の受入などの人材交流や、欧州とアジア各地で同様な人材育成プログラムを行っている大学拠点との連携強化があがっています。

○SCIENCE CENTER WORLD SUMMIT 2014（ベルギー）

2013 年 3 月 17 日-19 日、Technopolis（メヘレン／ベルギー）で開催された、SCIENCE CENTER WORLD SUMMIT 2014 に参加しました（山内保典助教）。

サミットのテーマになっていたPublic Engagementについて、冒頭で政策決定へ市民参加の話や、地球温暖化のような話も出ていましたが、最終的には「子どもを科学に Engage させるにはどうすれば良いのか、そのために私たちの科学館で何をしているのか」という問いに収束することが多かったです。そのため、誰を、何に、なぜ Engage させるのかは、まだ科学館関係者の間でコンセンサスができておらず、模索されている印象でした。日本の事例、例えば、科学館も深くかかわった World Wide Views のような取組や科学コミュニケーションセンターの取組は、Public Engagementという観点では世界でも先進的であり、科学館と大学の関係を強化していくことで、日本がリードできる可能性を強く感じました。科学館での体験を、オンラインで日常生活でも持続させる展示を参考に、科学館での学習と社会における科学技術の在り方を結びつけて考えることには可能性を感じました。

また Make ムーブメントに係わるセッションが二つあり、それは子どもを対象にした報告が中心でしたが、まさに工学とアートの接点なので、高等教育にも応用がきく話でした。また、その延長線上にCorder DOJOという、プログラム言語のMakeムーブメントがあり、3Dプリンタの普及に伴い、広がりを見せているようです。今は3Dプリンタでモノにすることに力点がありますが、そのうち仮想世界の構築にも展開すると予想されますので、その流れでシナリオワークショップに近い行為が行われるようになるかもしれません。タイや南アフリカでもイベントをするようなので、子ども向けという枠が崩れれば、適正技術の流れとも接近してくるように思います。

○インタビュー調査（イギリス）

2013年3月19～24日、イギリスに調査訪問を行いました（平川秀幸教授他）。Oxford大学Martin Schoolを訪問し、Head of Development and Partnershipsである Julian Laird 氏と会合を持ちました。ここでは、大学全体の学際的研究を組織的にマネージし、外部とコミュニケーションする組織であり、その人員、プロジェクトの 内容と運用の仕組み、また他のカレッジ等との連携のあり方や、社学連携の実態について意見交換を行いました。今後の連携の可能性も視野に入れた交流ができたといえます。加えて、NPOのSense about Scienceを訪問し、Assistant Directorである Emily Jesper ら三名にインタビューを行いました。組織の運営方法、資金調達、プロジェクトの中身など、突っ込んだ話を聞くことができました。とりわけ"Ask for evidence"の活動に関しては、日本のパブリック・エンゲージメントの現状なども含め、実りある議論ができました。また、本学からインターン学生の受け入れについて打診したところ、了承されました。最後に、Sussex 大学 Science and Technology Policy Research Unit (SPRU)の James Wildson 教授と個別のディスカッションを行いました。彼は、英国のみならず世界における科学コミュニケーション、科学への公共的関与の趨勢に関して大変詳しく、研究や実践の動向について多くの貴重な意見を伺うことができました。さらにいわゆる"Responsible Research Innovation"の今後の方向性についても意見交換を行いました。

イベント情報

主催：社会のためのイノベーションに関するネットワーク構築に向けたワークショップ

1. 主催

大阪大学コミュニケーションデザイン・センター　「公共圏における科学技術・教育研究拠点(STiPS)」

2. 日時

平成 26 年 1 月 31 日（金曜日）　　午後 1 時～午後 5 時

3. 会場

グランフロント大阪（大阪市北区）「ナレッジキャピタル」　カンファレンスルーム〈B-08〉
（アクセス：http://kc-i.jp/data/pdf/conference_map.pdf）

4. 趣旨（ゲストへの参加依頼文書より）

近年、世界的に「イノベーション」のあり方が再評価されつつあります。この流れの中で、「レスポンシブル・イノベーション(Responsible Innovation)」という概念が、欧米を中心として注目されています（別添 1 をご参照ください）。

当センターでは、これまでも社会と科学技術のより良い関係を目指すための活動を続けて参りましたが、このたび、この概念をベースとして、新たに「社会のためのイノベーションに関するネットワーク」の構築を目指すことにしました（別添 2 をご参照ください）。

本ネットワーク発足に先立ち、対象とすべきイシューがいかなる広がりを持つか、その射程を明らかにするため、関係領域の研究者や実務家等の皆さまをお招きし、ブレーンストーミングを行いたいと考えました。

5. 参加者

＜ゲスト＞

氏名	所属	氏名	所属
榎原友樹	株式会社 E-konzal 代表取締役	清水愛子	Aging Matters 代表
太刀川英輔	NOSIGNER 株式会社代表	西村勇也	NPO 法人ミラツク代表理事
福嶋慶三	尼崎市理事	藤田剛士	株式会社ブックスキャン副社長

＜公共圏における科学・技術教育研究拠点（STiPS）大阪大学メンバー＞

小林傳司、平川秀幸、八木絵香、神里達博、木ノ下智恵子、辻田俊哉、山内保典

6. プログラム

時間	内容
13：00－13：15（15 分）	受付
13：15－13：30（15 分）	趣旨説明
13：30－14：30（60 分）	ゲストの活動紹介
14：30－14：45（15 分）	CSCD 教員の活動紹介
14：45－15：15（30 分）	質疑応答
15：15－15：30（15 分）	休憩
15：30－17：15（105 分）	議論 1：今、我々の社会に不足している機能は何か 議論 2：社会と共に大学はどう変わっていくのか
17：15－17：45（30 分）	まとめ
17：45－18：00（15 分）	閉会

【別添 1】レスポンシブル・イノベーションとは

近年、とくに欧州を中心に「レスポンシブル・イノベーション」についての議論が科学技術政策の分野で広がっています。わが国でも 2007 年の産業構造審議会産業技術分科会の報告書「イノベーション創出の鍵とエコイノベーションの推進」にもこの概念が登場しています。

それらの議論の要点をまとめるならば、レスポンシブル・イノベーションとは、次のような取組を通じて、新しい技術の研究開発や社会への導入・普及をはかるものだと考えることができます。①新しい技術に対して、社会はどのような期待やニーズ、あるいは懸念や課題を抱いているのか。これを、技術そのものの特性や事業化のあり方、関連する法制度に反映させることにより、イノベーションを社会・人間・自然にとってより良いもの、責任あるものにすること。②これを、専門家や事業者、行政だけでなく、NPO や社会起業家、一般の消費者、ユーザーまで含めた多様な人々のコミュニケーションや、技術の社会的効果・影響に関する自然科学・人文・社会科学のトランスディシプリナリな研究を通じて行うこと。英国エクセター大学のリチャード・オーウェン（Richard Owen）らは、レスポンシブル・イノベーションを成り立たせる次の四つの次元を指摘しています[1]。

1. 予見的であること（Anticipatory）

イノベーションが経済・社会・環境などにもたらす意図的あるいは非意図的なインパクトを、実際に生じる前に予見し、分析すること。

2. 自己反省的であること（Reflective）

イノベーションの前提となっている目的や動機の適切さ、潜在的なインパクト、既知のことと未知のこと、不確実性、リスク、無知、仮定、問題、ジレンマについて検討すること。

3. 討議的であること（Deliberative）

イノベーションのヴィジョンや目的、取り組まれる問題、ジレンマについて対話や討論を行うことを通じて、一般市民や多様なステイクホルダーの幅広いパースペクティヴを取り入れた幅広い熟議を進めること。

4. 応答的であること（Responsive）

これらの再帰性（reflexivity）のプロセスを通じて、イノベーションが進むべき方向を定め、その進行に影響力を及ぼすこと。

[1] Richard Owen et al. “A Framework for Responsible Innovation”, Richard Owen et al (eds.) *Responsible Innovation: Managing the Responsible Emergence of Science and Innovation in Society*, John Wiley & Sons, 2013: pp.27-50.

【別添 2】　「社会のためのイノベーションに関するネットワーク」について

近年、先進諸国を中心に「イノベーション」への期待が高まっており、地域・国・世界などさまざまなレベルで、多種多様な施策が展開されています。これは、現在の豊かさを今後も維持・発展していく上で、産業競争力の強化や、次世代を担う人材の育成、研究開発投資の効率化、それらを支えるさまざまな社会的インフラや制度の整備など、総合的な対策が不可欠だという認識が広がっているためです。日本でも 2006 年に総合科学技術会議において、「イノベーション創出総合戦略」が提出され、その後、政権が変わりながらもイノベーション政策重視の姿勢は現在まで継続されています。また産業界においても、2012 年には経団連が提言、『「イノベーション立国・日本」構築を目指して』を公表するなど、イノベーション、とりわけ科学技術イノベーション政策への期待は高まっています。

しかし、特に成熟した先進諸国の場合、このような政府や産業界からの視点だけでは、適切にイノベーションを進めていくことは難しくなっています。というのも、われわれの社会には、実に多様な価値観とライフスタイルが共存しており、それらが互いに影響を及ぼしながら、日々多様なニーズや新しいリスクを生じさせています。このような、高度に複雑な動的ネットワークとしての社会状況においては、従来の中央集権的、あるいは開発主義的な政策手段では、とうてい対応できないことは明らかでしょう。

以上の問題意識を背景に現在、欧米の科学技術政策に関わる人々を中心に、レスポンシブル・イノベーション（Responsible Innovation）という考え方が提示されつつあります。これは、イノベーションを進めるにあたって、企業や行政はもちろんのこと、消費者や NPO、大学やメディアなど、社会の多様なアクターとのコミュニケーションを通じて、新しい技術に対する社会の期待、ニーズ、懸念等を可視化し、実際の技術開発や事業化また関連する法制度の制定などの場面において、それらを反映させようというものです。これにより、社会・人間・自然にとってより良いイノベーションを実現しようというわけです。

大阪大学コミュニケーションデザイン・センターでは、2011 年秋より、文部科学省の支援のもと「公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）」を発足させ、社会のための科学技術のあり方を検討してきています。この一環として、「社会のためのイノベーション」関するネットワークを立ち上げることを企画しました。これは、社会と科学技術が相互作用をしつつ、より良い形で「共進化」していくための条件を、実際の「イシュー」のレベルに焦点を当てながら模索することを目指すものです。そこでは、さまざまな分野におけるアクターやステイクホルダーが、科学技術と社会のイノベーションに関連する経験と思想を共有し、さらに創造的に発展させることで、新たな提言や活動につないでいくことが期待されます。

共催：科学技術セミナー

現代社会において、科学技術は日常生活の中で非常に大きな役割を担っています。その科学技術のあり方は政府の科学技術政策の中で位置付けられ、研究者集団の振興を支えてきました。現在、日本においては、平成 23 年に閣議決定された第 4 期科学技術基本計画に基づき、「新たな価値の創造に向けて、我が国や世界が直面する課題を特定した上で、課題達成のために科学技術を戦略的に活用し、その成果の社会への還元を一層促進する」という科学技術イノベーション政策の振興が図られ、具体的に政策を遂行するための手段は政府により諸施策が進められています。

STiPS 共催の本セミナーは、このような科学技術政策に焦点を当て、参加された皆さまが広く俯瞰的な視野でご自身の専門分野を発展させ、かつ大阪大学の研究力を向上させるための情報交換の場としてシリーズ開催します。

【共催イベント】第 2 回科学技術セミナー

○講演タイトル：文献データを使った「大学の評価」とその意味
○日　時：2013 年（平成 25 年）5 月 24 日（金）13:30-15:30
○場　所：大阪大学銀杏会館 3 階　大会議室
○講演者：調　麻佐志（東京工業大学理工学研究科　准教授）
○主催：大阪大学大型教育研究プロジェクト支援室

科学技術政策研究所（NISTEP）が 3 月に発表した報告書「科学研究のベンチマーキング 2012 -論文分析でみる世界の研究活動の変化と日本の状況-」では、日本の産出する論文数の伸び悩みがみられることや論文算出においてメインプレーヤーである国立大学の論文数が伸び悩んでいることなどが指摘されています。また、文部科学省の研究大学強化促進事業では、そのような状況を打破するために、世界水準の優れた研究活動や研究マネジメント体制の強化などを支援することが謳われています。

上記のような根拠を示すデータとして論文の被引用数等の文献データが「客観的データ」としてあげられます。そこで、第 2 回目となる本セミナーでは、文献データを扱う科学計量学に焦点をあて、そのデータの性質や解析手法の意味をどのように理解すればよいのかという基本的な知識を学びながら、様々な情報を圧縮して得られたデータをどのように個人の研究評価や大学全体の評価と結びつければよいのかを参加者のみなさまと議論をしたいと考えております。ご関心のある方々に幅広く参加していただければと思います。（イベント告知文より）

詳細は、下記リンクをご参照ください。
http://www.lserp.osaka-u.ac.jp/ura/pressrelease/20130426.html

【共催イベント】第 3 回科学技術セミナー

○講演タイトル：民間助成財団とはなにか、研究者はどのように活用すればよいのか
○日 時：2013 年（平成 25 年）7 月 31 日（水）15:00-17:00
○場 所：大阪大学銀杏会館 3 階 大会議室
○講演者：渡辺 元（公益財団法人　助成財団センター　プログラム・ディレクター）

民間助成団体の助成金は奨学金を含め総額 600 億を超えます。国が科学研究費への投資を強め科学研究費補助金等の競争的資金が増大する一方で、民間助成財団は各々の定款に基づきながら対象とする分野を含めたプログラムの設計を独自に行っています。民間助成財団の概略と現状やその性格、競争的資金との違いについてお話しをしていただきながら、それぞれの研究者や研究支援に関わる方が、有効に競争的資金と民間財団を活用する戦略を練るきっかけになればと思います。（イベント告知文より）

詳細は、下記リンクをご参照ください。
http://www.lserp.osaka-u.ac.jp/ura/pressrelease/20130708.html

【共催イベント】第 4 回科学技術セミナー

○講演タイトル：EU の科学技術戦略と日欧連携
○日 時：2013 年（平成 25 年）10 月 25 日（金）13:30-15:30
○場 所：テクノアライアンス棟 1F 交流サロン
○講演者：市岡利康（日欧産業協力センター プロジェクトマネジャー）

EU では、1984 年から研究や技術開発を推進するために「研究枠組み計画（Framework Programme）」が設定され、その下で大きな研究資金が動いています。本年は 2007 年から 始まった FP7 が最終年を迎えており、来年からは新たな枠組みとして HORIZON2020 が はじまります。今回のセミナーではこのような EU の科学技術戦略がどのような経緯で設立されてきたかや、何に焦点に当て戦略が練られているのかについてお話しをしていただくと同時に、研究開発の場面において日本は EU とどのような連携を取ることが可能かに ついて触れていただきます。（イベント告知文より）

詳細は、下記リンクをご参照ください。
http://www.lserp.osaka-u.ac.jp/ura/pressrelease/20131002.html

共催：「シリーズ：適正技術」

STiPS 共催の「シリーズ：適正技術」では、ものづくり、国内外での社会貢献、ビジネスの領域をつなぐ「適正技術」について、ワークショップや実践を通じて考えていきます。

「シリーズ：適正技術」第１回ワークショップ開催

○日時：10 月 11 日（金）18:00～20:00
○場所：大阪大学ステューデント・コモンズ１F　開放型セミナー室（豊中キャンパス）
○参加対象：大阪大学学生（学部学生・大学院学生）、大阪大学教職員、その他の大学学生、一般（とくに「地域が変わるものづくり」の実践に関心がある方）
○定員：40 人
○ゲスト講師：渡邉さやか（一般社団法人 re:terra（リテラ）代表）
○ファシリテーター：西村勇也（NPO 法人ミラツク代表理事）
○対談ゲスト：敦賀和外（大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任准教授）、津田和俊（大阪大学大学院工学研究科創造工学センター助教）
○主催：大阪大学コミュニケーションデザイン・センター（CSCD）
○共催：大阪大学グローバルコラボレーションセンター（GLOCOL）、大阪大学大学院国際公共政策研究科（OSIPP）稲盛財団寄附講座、公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）、NPO 法人ミラツク

第１回のワークショップは、3 つのステップに沿って、「地域が変わるものづくり」について考えます。①途上国でのビジネス開発事業や国内の地域活性事業に取り組んでおられる一般社団法人 re:terra（リテラ）代表の渡邉さやかさんをゲスト講師としてお招きし、「地域が変わるデザイン」についてお話を伺います。②ゲスト講師の渡邉さんと、ものづくりや国際協力を専門とする大阪大学教員の対談を行います。③NPO 法人ミラツク代表理事の西村勇也さんをファシリテーターに、フロア全体で議論します。これらのステップに沿って、地域コミュニティが抱える課題の解決のために、技術をどのようにデザインすべきか、皆さまと共に考えていきます。（イベント告知文より）

「シリーズ：適正技術」第 2 回ワークショップ開催

○ 日時：11 月 21 日（木）18:00～20:00
○ 場所：大阪大学サイエンス・テクノロジー・アントレプレナーシップ・ラボラトリー（e-square）3 階さいえんす工房（吹田キャンパス）
○ ゲスト講師：NOSIGNER 株式会社　代表、デザインアーキテクト 太刀川英輔
○ ファシリテーター：NPO 法人ミラツク　代表理事　西村勇也
○ 参加対象：大阪大学学生（学部学生・大学院学生）、大阪大学教職員、その他の大学学生、一般（とくに「地域が変わるものづくり」の実践に関心がある方）
○ 定員：50 人
○ 主催：大阪大学コミュニケーションデザイン・センター（CSCD）
○ 共催：大阪大学グローバルコラボレーションセンター（GLOCOL）、大阪大学大学院国際公共政策研究科（OSIPP）稲盛財団寄附講座、公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）、NPO 法人ミラツク
○ 協力：大阪大学 21 世紀懐徳堂

「シリーズ：適正技術」第 3 回ワークショップ開催

○ 日時：2013 年 12 月 19 日（木）18:00～20:00
○ 場所：大阪大学ステューデント・コモンズ 2 階マッチングセミナー室（豊中キャンパス）
○ ゲスト講師：issue+design　代表　筧裕介
○ ファシリテーター：NPO 法人ミラツク　代表理事　西村勇也
○ 参加対象：大阪大学学生（学部学生・大学院学生）、大阪大学教職員、その他の大学学生、一般（とくに「地域が変わるものづくり」の実践に関心がある方）
○ 定員：50 人
○ 主催：大阪大学コミュニケーションデザイン・センター（CSCD）
○ 共催：大阪大学グローバルコラボレーションセンター（GLOCOL）、大阪大学大学院国際公共政策研究科（OSIPP）稲盛財団寄附講座、公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）、NPO 法人ミラツク
○ 協力：大阪大学 21 世紀懐徳堂

「シリーズ：適正技術」Fieldwork & Design Session

○ 日時：2014 年 2 月 23 日（日）～24 日（月）

○ 場所：滋賀県高島市朽木麻生「森林公園くつきの森」ほか

○ 参加人数：29 人

○ 主催：大阪大学コミュニケーションデザイン・センター（CSCD）

○ 共催：大阪大学大学院国際公共政策研究科（OSIPP）稲盛財団寄附講座、公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）、NPO 法人ミラツク

○ 協力：特定非営利活動法人 結びめ

○ 詳細：http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/2014/000677.php

共催：セミナー「適正技術と BOP ビジネス—バングラデシュとカンボジアの経験から」

○ 日時：11 月 16 日（土）16：00～18：00

○ 場所:大阪大学ステューデント・コモンズ１F　開放型セミナー室(豊中キャンパス)

○ ゲスト講師

・ 眞子岳（東洋大学国際地域学部助教）

「バングラデシュにおける適正技術と BOP ビジネス」

・ By Sosatha（東洋大学国際地域学研究科国際地域学専攻）

「カンボジアにおける水衛生分野の適正技術」

○ 参加対象：大阪大学学生（学部学生・大学院学生)、大阪大学教職員、その他の大学学生、一般

○ 定員：40 人

○ 主催：大阪大学コミュニケーションデザイン・センター（CSCD）

○ 共催：大阪大学学際融合教育研究センター、公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

○ 協力：大阪大学 21 世紀懐徳堂

共催：第１回 資源・エネルギー法研究会 「ドイツにおける原子力訴訟の日本法への示唆」

○日時：３月２６日（水）１６時より
○場所：大阪大学豊中キャンパス 国際公共政策研究科棟２F 講義シアター
○共催：大阪大学大学院法学研究科「プロジェクトタイガー（エネルギー、化学物質、水管理政策における市民参加型の意思決定手法に関する国際比較）」
○共催：「公共圏における科学技術・教育研究拠点」（STiPS）
○報告者：赤間聡氏（高知大学人文学部・講師）
○司会：資源・エネルギー法研究会代表　松本充郎

概要（研究会案内文より）：

赤間先生は、日独の原子力施設の安全審査について、行政法及び法学方法論の観点から着実に研究を蓄積されています。本研究会では、直近の論文で展開された議論―第１・第３ミュルケム・ハインリッヒ判決を分析し、その知見を踏まえてもんじゅ差戻し後控訴審判決を生かす道を探る―を中心に、最新の洞察をご紹介頂きます。

報告者の主要な研究業績（研究会案内文より）：

「行政の判断過程における過誤欠落に関する一考察：ヴィール判決以降、第一、第三ミュルハイム・ケルリッヒ判決及びもんじゅ判決を題材に」高知論叢 108 号 45-76 頁(2013 年)

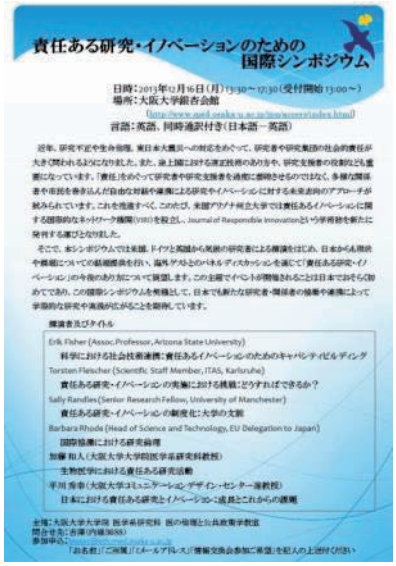
「専門技術的裁量と科学技術的判断に関する行政の優先的判断権の論理－原発の安全性判断を題材に－」青山法学論集 53 巻 2 号 69-111 頁(2011 年)

「科学技術法領域における法律の留保－規範具体化行政規則を中心に－」青山法学論集 51 巻 3・4 号 291-317 頁(2010 年)

協力：「責任ある研究・イノベーションのための国際シンポジウム」
（International Symposium for Responsible Research and Innovation）

○日時：2013 年 12 月 16 日（月）13:30～17:30（受付開始 13:00～）
○場所：大阪大学吹田キャンパス銀杏会館３階阪急電鉄・三和銀行ホール
○主催：大阪大学大学院医学系研究科医の倫理と公共政策学教室
○共催：文部科学省科学研究費新学術領域研究「ゲノム支援」
○協力：大阪大学・京都大学「公共圏における科学技術・教育研究拠点」（STiPS）

【概要】



近年、研究不正や生命倫理、東日本大震災への対応をめぐって、研究者や研究者集団の社会的責任が大きく問われるようになりました。また、途上国における適正技術のあり方や、研究支援者の役割なども重要になっています。「責任」をめぐって研究者や研究支援者を過度に萎縮させるのではなく、多様な関係者や市民を巻き込んだ自由な対話や連携による研究やイノベーションに対する未来志向のアプローチが試みられています。これを推進すべく、このたび、米国アリゾナ州立大学では責任あるイノベーションに関する国際的なネットワーク機関（VIRI）を設立し、Journal of Responsible Innovation という学術誌を新たに発刊する運びとなりました。

そこで、本シンポジウムでは米国、ドイツと英国から気鋭の研究者による講演をはじめ、日本からも現状や課題についての話題提供を行い、海外ゲストとのパネルディスカッションを通して「責任ある研究・イノベーション」の今後のあり方について展望します。この主題でイベントが開催されることは日本でおそらく初めてであり、この国際シンポジウムを契機として、日本でも新たな研究者・関係者の協働や連携によって学際的な研究や実践が広がることを期待しています。（イベント告知文より）

【プログラム】

13:30-13:35 開会

13:35-13:40 開会挨拶：池田雅夫（大阪大学副学長）

13:40-14:20 講演 1：Erik Fisher (Assoc. Professor, Arizona State University)

科学における社会技術連携：責任あるイノベーションのためのキャパシティビルディング

14:20-14:50 講演 2：Torsten Fleischer (Scientific Staff Member, ITAS, Karlsruhe)

責任ある研究・イノベーションの実施における挑戦：どうすればできるか？

14:50-15:00 休憩

15:00-15:30 講演 3：Sally Randles (Senior Research Fellow, University of Manchester)

責任ある研究・イノベーションの制度化：大学の文脈

15:30-15:45 講演 4：Barbara Rhode (Head of Science and Technology, EU Delegation to Japan)

国際協働における研究倫理

15:45-16:00 講演 5：加藤和人（大阪大学大学院医学系研究科教授）

生物医学における責任ある研究活動

16:00-16:15 講演 6：平川秀幸（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター准教授）

日本における責任ある研究とイノベーション：成果とこれからの課題

16:15-16:25 休憩

16:25-17:25 パネルディスカッション

司会：吉澤剛（大阪大学大学院医学系研究科准教授）

パネリスト：Erik Fisher, Torsten Fleischer, Sally Randles, Barbara Rhode, 加藤和人, 平川秀幸

17:25-17:30 閉会挨拶

司会：吉澤剛（大阪大学大学院医学系研究科准教授）

パネリスト：Erik Fisher, Torsten Fleischer, Sally Randles, 加藤和人, 平川秀幸

阪大拠点主催：「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）

学際的教育が有効に機能するために、授業を担当する教員が、他の教員の教えている内容を知ることは有益です。しかし実際には、学生は様々な参画教員の授業を受け、異なる領域の知見に触れることができますが、参画教員同士がそうした経験をする場は限られています。この STiPS Handai 研究会は、学内外の研究者を招き、学生だけでなく教員が相互に学び合うことを目的とした、少人数の議論を中心とした研究会です。これをきっかけに学内を中心に協力教員の輪を拡充するとともに、相互理解を深めていくことが期待されます。実際にこの研究会で講演頂いた方に、来年度授業提供を頂くケースも生まれました。下記は STiPS の Web サイトに掲載された実施報告です。

第１回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

○タイトル：「政策のための科学」教育プログラムに関する九州大学の取組について
○講演者：永田 晃也 教授（九州大学大学院 経済学研究院）
○日時：5 月 29 日（水）17:00-18:00
○場所：大阪大学　豊中キャンパス　全学教育推進機構ステューデント・コモンズ 2 階セミナー室 2

5 月 29 日（水）に、大阪大学 豊中キャンパス 全学教育推進機構 ステューデント・コモンズ 2 階 セミナー室 2 にて、第 1 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）が開催されました。学生を中心に多くの方に、ご参加いただきました。

第 2 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

○タイトル：Thinking after Fukushima
○講演者：アラン＝マルク・リュー教授（リヨン第三大学）
○日時：6 月 27 日（木）14:40-16:10
○場所：大阪大学　豊中キャンパス　全学教育推進機構ステューデント・コモンズ 1 階開放型セミナー室

2013 年 6 月 27 日（木）に、大阪大学 豊中キャンパス 全学教育推進機構 ステューデント・コモンズ 1 階 開放型セミナー室にて、第 2 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）を開催しました。

今回は、リヨン第三大学のアラン＝マルク・リュー教授をお招きし、「Thinking after Fukushima（フクシマ以後の思考）」というタイトルでご講演頂きました。

フクシマの出来事を分析、叙述、説明する言説を批判することにより、フクシマ以後の思考を構成する概念を導き出すという試みが、リスク、信用、知識基盤社会という 3 つの言説を対象に行われました。

フクシマを日本史ではなく、世界史におけるターニングポイントとして位置づけ、その膨大なデータの蓄積に基づき、世界と人類にとっての教訓を引き出そうとする氏の姿勢が印象的でした。

第 3 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

○題目：技術の文化と価値の文化をつなぐ計画の可能性
○講演者：小浦 久子 准教授（大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻）
○日時：7 月 31 日（水）16:20-17:50
○場所：大阪大学　豊中キャンパス　全学教育推進機構ステューデント・コモンズ 2 階セミナー室 2

2013 年 7 月 31 日（水）に、大阪大学 豊中キャンパス 全学教育推進機構 ステューデント・コモンズ 2 階 セミナー室 2 にて、第 3 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）を開催しました。

今回は、大阪大学工学研究科の小浦久子先生をお招きし、「技術の文化と価値の文化をつなぐ計画の可能性」というタイトルでご講演頂きました。

進歩と技術効率の優劣を重視する「技術の文化」との親和性が高い 20 世紀の「開発」。地域固有の特殊性を重視する「価値の文化」を重視する 21 世紀の「開発」。開発のあり方が移行する中、地域の歴史や文化と景観の関係をコミュニケーションするツールとして計画が担う役割を、京都市などの具体例を交えてご説明頂きました。今後の開発や、そこで行われるコミュニケーションの在り方を考える良い機会となりました。また、景観法が既存の縦割りの施策を統合していた点も興味深かったです。

第 4 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

○題目：Innovation+Regulation+Communication: Responsible Innovation Triangle
○講演者：平川 秀幸 准教授（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター）
○日時：9 月 25 日（水）16:20-17:50
○場所：大阪大学　豊中キャンパス　全学教育推進機構ステューデント・コモンズ 2 階セミナー室 2

先進国を中心に物事の決め方や未来への進み方について、多様な人々の対話・協働が求められているなか、イノベーションについての新しい考え方も芽生えています。今回の研究会では、レスポンシブル・イノベーションという概念について、イノベーション、規制、コミュニケーションの 3 つの観点からご説明頂きました。また、「イノベーション」対話の促進に向けたデザイン思考や未来思考に関する事例が紹介され、今後の科学技術に関するコミュニケーションの在り方について考える材料が多く提供された貴重な場となりました。

第 5 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

○題目：希少疾患と医療と社会：SORD との共同調査から
○講演者：山中 浩司 教授（大阪大学大学院 人間科学研究科 人間科学専攻）
○日時：10 月 23 日（水）16:20-17:50
○場所：大阪大学　豊中キャンパス　全学教育推進機構ステューデント・コモンズ 2 階セミナー室 2

2013 年 10 月 23 日（水）に、大阪大学 豊中キャンパス 全学教育推進機構 ステューデント・コモンズ 2 階 セミナー室 2 にて、第 5 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）を開催しました。

今回は、大阪大学大学院人間科学研究科の山中浩司先生をお招きし、「希少疾患と医療と社会：SORD との共同調査から」というタイトルでご講演頂きました。

現在、海外の医薬品業界で希少疾患が注目されています。その背景で、NORD や EURODIS といった希少疾患患者の支援団体による、研究推進や難病政策への提言があります。日本にも、SORD（NPO 法人希少難病患者支援事務局）がありますが、海外ほどの影響力を持つには至っていません。日本における希少疾患患者のおかれた境遇、とりわけ SORD メンバーに対するインタビュー調査結果の報告には、当事者と科学技術と制度の相互作用、希少疾患の持つ歴史性、遺伝性疾患の重み、情報共有と保護のバランス、オンライン・コミュニティの可能性など、様々なことを考えるきっかけを頂きました。

第 6 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

○ 題目：研究シーズと持続可能社会ビジョンの結節点　メゾレベル研究の方法論と実践
○ 講演者：原 圭史郎 特任准教授（大阪大学環境イノベーションデザインセンター）
○ 日時：11 月 20 日（水）16:20-17:50
○ 場所：全学教育推進機構ステューデント・コモンズ 2 階セミナー室 2

2013 年 11 月 20 日（水）に、大阪大学 豊中キャンパス 全学教育推進機構 ステューデント・コモンズ 2 階 セミナー室 2 にて、第 6 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）を開催しました。

今回は、大阪大学環境イノベーションデザインセンターの原圭史郎先生をお招きし、「研究シーズと持続可能社会ビジョンの結節点：メゾレベル研究の方法論と実践」というタイトルでご講演頂きました。

科学技術シーズと社会ビジョンをつなげるにはどうすれば良いか。今回のご講演では、その問いの重要性に加え、ビジョン主導型（例：7 世代研究プロジェクト）、シーズ主導型（例：熱電変換技術プロジェクト）、地域との協働・社会実験（例：吹田市民の省エネ行動・意識調査）という 3 つの方法論と実践例をご紹介頂きました。また学生主体のグループワークや自治体との連携も活用した、メゾレベル研究や実践を担う人材育成にも触れて頂けました。質疑応答では、プロジェクトの具体的活動、メゾレベル研究や実践の評価の在り方、複層的にメゾレベルを捉えることの利点と欠点、動的な社会や研究シーズとの相互作用などについて議論が行われました。

第 7 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

○ 題目：原子力リスク規制の再構築に向けて
○ 講演者：松本 充郎 准教授（大阪大学大学院国際公共政策研究科）
○ 日時：12 月 18 日（水）16:20-17:50
○ 場所：全学教育推進機構ステューデント・コモンズ 2 階セミナー室 2

第 7 回 STiPS Handai 研究会

STiPS

原子力リスク規制の再構築に向けて

松本 充郎

大阪大学大学院国際公共政策研究科 国際公共政策専攻，准教授

2013 年 12 月 18 日（水）16:20～17:50
大阪大学 豊中キャンパス
全学教育推進機構ステューデントコモンズ 2 階 セミナー室 2
参加無料 事前申し込み不要

本研究会では、事故調の報告書から 3.11 の事故の原因のうち明らかにされた部分とそうでない部分を切り分け、3.11 までの原子力リスク規制の制度と裁判例を総括し、2012 年 6 月の法改正によってどの部分が改正され、どのような課題が残されているかを明らかにしようとする試みについてご発表頂き、議論を行います。

【講演者紹介】松本 充郎 MATSUMOTO Mitsuo
大阪大学大学院国際公共政策研究科 国際公共政策専攻，准教授。専門は、行政法、環境法、水法。

CSCD

お問い合わせ先：stips-staff@cscd.osaka-u.ac.jp
＊講演タイトルは、変更する可能性があります。

2013 年 12 月 18（水）に、大阪大学 豊中キャンパス 全学教育推進機構 ステューデント･コモンズ 2 階 セミナー室 2 にて、第 7 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）を開催しました。

今回は、大阪大学大学院国際公共政策研究科の松本充郎先生をお招きし、「原子力リスク規制の再構築に向けて」というタイトルでご講演頂きました。

3.11 福島第一原子力発電所事故から何を学び、その教訓は今後のエネルギー政策や環境法にどのように生かされるべきなのだろうか。今回は、行政法・環境法の観点から、原子力規制の今後の在り方について、ご講演頂きました。初めに、事故原因についてどこまで明らかにされたかを明確にして頂いた後、リスク管理における条理としての未然防止原則と予防原則、さらに災害法における「準備と反応」に関するご検討を説明頂きました。その後、事故以前の原子力法制及び裁判例をご紹介頂き、今後の原子力リスク規制の展望をお話頂きました。質疑応答では、原子力規制の今後の在り方に加え、原子力安全学的な枠組みの構築の在り方についても議論が行われました。

第 8 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

○ 題目 1 :「日本の食品問題において消費者の不安感に影響を与える要素の考察」
○ 講演者 1 : 小森 駿介（大阪大学大学院工学研究科博士前期課程ビジネスエンジニアリング専攻）

○ 題目 2 :「多メディア時代の科学技術ジャーナリズム :「翻訳」、「批判」から「構築」へ」で
○ 講演者 2 : 奥西 亮太（大阪大学大学院理学研究科博士前期課程生物科学専攻）

○ 日時 : 2014 年 2 月 19 日（水）16:20-18:00
○ 場所 : 全学教育推進機構ステューデント・コモンズ 2 階セミナー室 2

2014 年 2 月 19 日（水）に、大阪大学 豊中キャンパス 全学教育推進機構 ステューデント・コモンズ 2 階 セミナー室 2 にて、第 8 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）を開催しました。

今回の発表者は、STiPS を修了予定の学生、奥西亮太さんと小森駿介さんでした。

必修科目「研究プロジェクト」の集大成として、それぞれが一年かけて進めてきた研究成果を報告しました。学外からの参加者も多く、およそ 30 人の方にご参加頂きました。ありがとうございました。

最初に報告したのは小森さん。タイトルは「日本の食品問題において消費者の不安感に影響を与える要素の考察」です。2002 年以降の食品問題に関する消費者の不安の推移の背景にある事例を振り返った上で、科学で定量化可能な問題では「啓蒙」が必要とされる一方で、科学の不確実性が原因となっている問題では「リスクコミュニケーション」が必要であると論じました。

次に報告したのは奥西さん。タイトルは「多メディア時代の科学技術ジャーナリズム :「翻訳」、「批判」から「構築」へ」です。これまで科学技術ジャーナリズムに関して行われた議論を概観した上で、科学技術ジャーナリズムの規範的役割として、「批判的機能」、「科学技術インタープリター的機能」、「アジェンダ構築的機能」の 3 つを挙げ、多メディア時代においては「アジェンダ構築的機能」が重要になると論じました。

学外の方からの意見は、学生にとって大変刺激になったようです。これらの研究成果については、何らかの形で公開したいと考えておりますので、皆様からもコメントを頂ければ幸いです。

最後に、小森さん、奥西さん、ますますのご活躍を願っております。

学生活動

学生勉強会報告

京都大学医学研究科　社会健康医学専攻　医療経済学分野　花木奈央

開催主旨

本プログラムに参加している学生はその専門分野が多岐にわたり、また社会人経験があるものも多く多様な背景を有する学生が参加している。本プログラム学生全員が参加する授業は週に 1 コマ（90 分）のみであったこと、講義形式の授業が多かったためことから、学生同士が交流し通常の授業では解決されなかった疑問点について話し合う時間が必要であるという意見が出された。

そのため、参加学生にとって都合のよい時間を選び不定期に勉強会を開催することとした。集まる場所については受講学生の利便性から選定した。参加学生が自由に使える部屋が一部屋でもあれば、このような勉強会を行う、また学生同士でのプロジェクトを行うなどの負担はかなり軽減できると思われる。

第 1 回

日時・場所：2013 年 6 月 21 日　12:00 から 13:00 ごろ　@京都大学医学部構内 G 棟内の共有スペース
参加人数　：6 名
概要　　：本勉強会の趣旨・目的の確認　　各々の関心のある分野の情報提供

第 2 回

日時・場所：2013 年 6 月 28 日　12:00 から 13:00 ごろ　@京都大学医学部構内 G 棟内の共有スペース
参加人数　：6 名
概要　　：本勉強会の目的を整理し、実施方法について確認

第 3 回

日時・場所：2013 年 7 月 5 日　12:00 から 13:00 ごろ　@京都大学医学部構内 G 棟内の共有スペース
参加人数　：5 名
概要　　：医療経済について、医療従事者である学生から実際の医療現場について説明、医療を測るシステム・その可視化について

第 4 回

日時・場所：2013 年 7 月 25 日　9：00 から 10：00 ごろ　@吉田南総合館 1 共 23 教室
参加人数　：5 名（ゲストスピーカー：法学部修士課程在籍の学生）
概要　　：政策とは、医療政策の問題についてのディスカッション

第 5 回

日時・場所：2013 年 7 月 25 日　9：00 から 10：00 ごろ　@吉田南総合館 1 共 23 教室
参加人数　：5 名（ゲストスピーカー：法学部修士課程在籍の学生）
概要　　：医療政策を通じて政策を考える、医療政策にかかわる人間について、また現状の問題に関するディスカッション

学生読書会報告

副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」受講生
大阪大学工学研究科　環境・エネルギー工学専攻　博士後期課程１年　松尾智仁

開催主旨

本副専攻プログラムには、文系、理系の双方を含む多様な研究科の学生が所属しています。そのため、同じ副専攻に所属していながら、学生によって興味・関心の範囲は大きく異なります。そのような多様な学生が同じ副専攻に所属し学習することには立場、立論方式の違いを意識し、複眼的視野を養うために極めて有効だと考えられます。

しかしながら、本副専攻の受講生は、週に数度の講義を除いて、互いに意見を公開する機会はなく、せっかくの多様性は必ずしも生かされていないように思います。そのため、多様な学生の意見交換を促進するため、自主勉強会を企図しました。

特に読書会という形式を選択した理由として、学生のバックグラウンドが多様であるため、特定のテーマについての勉強会という形式では知識レベルの乖離により期待した学習効果が得られない可能性があると考え、まずは議論のベースとなる共有知識/共通言語の養成を目的として、科学技術政策分野の基礎的文献の読書会を開催しました。

読書会（勉強会）は、キックオフミーティングを含め４回行いました。また、開催にあたっては、副専攻の教員の皆様に教室の確保や機材の貸出し、資料提供などの面で多くの協力を頂きました。

キックオフミーティング

日時・場所：2013 年 7 月 24 日　18:00 から 20:00 ごろ　@豊中キャンパス　教育実践センター４階会議室
参加人数　：7 名程度
概要　　：開催趣旨に賛同してくれた学生と、具体的な内容、日程等について相談しました。

第 1 回読書会

日程・場所：2013 年 8 月 28 日　18:30 から 20:00 ごろ　@豊中キャンパス　教育実践センター４階会議室
参加人数　：4 名程度
概要　　：『科学は誰のものか　社会の側から問い直す（平川秀幸先生　NHK 出版生活人新書）』を課題図書とし、内容の疑問点などについて意見交換を行いました。

第 2 回読書会

日程・場所：2013 年 11 月 6 日　18:30 から 20:00 ごろ　@豊中キャンパス　教育実践センター４階会議室
参加人数　：4 名程度
概要　　：『リスクガバナンスにおける「専門性の民主化」と「民主制の専門化」の諸問題』の前半部（第１部　理論編）を課題図書とし、内容の疑問点などについて意見交換を行いました。

第 1 回勉強会

日程・場所：2013 年 12 月 4 日　18:30 から 20:00 ごろ　@豊中キャンパス　教育実践センター２階講義室

参加人数　：３名程度

概要　　：STiPS に所属する京都大学の大学院生（尾上さん）に、主専攻における研究内容、および主専攻における研究と公共圏における科学技術政策の関係を紹介して頂き、意見交換を行いました。

感想など

読書会/勉強会の内容については、期待どおり、多様なバックグラウンドに基づく様々な学生が意見交換をすることで、自分の主専攻における知識だけでは気づかなかった視点に気づくことができたと思います。特に、人間科学研究科で政策について研究している学生（佐桑くん）との意見交換では、学問分野が違えば議論の前提となる知識や議論の組み立て方が大きく異なることを実感することができ、とてもおもしろく感じました。また、京都大学の尾上さんとの勉強会では、同じ STiPS の所属でありながら問題の捉え方が異なることを学びました。

他方、読書会/勉強会の運営については、多くの課題を感じました。第１に、月１度程度の開催周期を目指していたのですが、日程調整等に難航し、また年末からは私が修士論文の執筆に追われたため、実際には２～３ヶ月に１度程度の開催となってしまいました。第２に、参加人数が比較的少数にとどまり、必ずしも参加者の多様性が確保できないことがありました。

しかしながら、全体として読書会では一定の成果が得られたと考えており、運営方法については改良を加えながらも、今後も読書会/勉強会を継続していきたいと考えています。

文部科学省長期インターンシップ参加報告

副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」受講生
大阪大学生命機能研究科　博士後期課程 3 年　和田久司

これまで主専攻の研究活動に携わる中で、科学技術研究を持続的に継続させる環境づくりに、研究者、制度設計者それぞれの立場からどのような関わり方ができるのかを考えてきました。それをきっかけに履修を決めた「政策のための科学」プログラムでは、科学技術研究の社会的影響をキーワードに科学技術政策を学んできましたが、同時に実際の政策設計の現場がどういうものかも知りたいと考えていました。

今回、文部科学省でのインターンシップを引き受けていただいたのは、大臣官房政策課評価室です。政策課評価室では省全体の政策、省所管の独立行政法人に対する評価のあり方から評価までを担当していると聞きました。そのため、まさに science for policy と policy for science を実際に両立させる現場で、制度設計プロセスでのアクター・関わり方、研究者と行政それぞれの専門性・関係性を具体的に知る機会になるのではないかと考えました。

インターンシップでは科学技術・学術審議会、独立行政法人評価委員会、日本学術会議での委員会など、様々な会議・ヒアリングに参加させていただきました。そこで行政という仕事として印象的だったのは、多くの場合、研究現場や実生活の場において、私たちは既に決まった予算・政策などでしか行政の仕事に接する事ができていないということ。さらに個々の委員会・会議は研究者・行政官がともに議論を重ねる場ではありますが、同時に議論を受けたリソースの準備など、政策として機能するまでのロジスティクスの多くを担う、ということでした。

政策・ビジョンを作りあげていく中で、どのように研究者と行政官の意見を盛り込んでいくか、研究を含む活動と現状の課題・問題をどのように評価し予算配分を決めるか。これらは科学技術研究に限らず、少ないリソースの中でいかに sustainable な活動にするかに直結します。誰のためか、誰が関わるのか。どのように研究者・行政・社会をつなぐのか。非常に重要な課題だということをこの経験を通して改めて痛感しました。今回のインターンシップは週 2 回、12 週と比較的長い期間でしたが、その分、現場の進め方・問題意識を知ることができ、今後自分の専門性をどのように活かすかを考える上で、非常に有益な充実したインターンシップとなりました。

東京大学等との共同学生調査

【調査目的】

「科学技術イノベーション（STI）政策における『政策のための科学』推進事業」のうち、基盤的研究・人材育成拠点整備事業での拠点間共同プログラムについて、2012 年度においては、アンケート調査及びグループインタビュー調査を通じて、東京大学の大学院生のニーズ調査を実施しました。

この調査の目的は、STI 領域の新たな教育プログラムに対する期待、求める授業内容やインターンシップ活動についての具体的なニーズを把握し、新たな教育プログラムの運用や広報への効果的な活用をめざすところにありました。

今回の調査は、すでに 2013 年度から実施されている「政策のための科学」関連の教育プログラムを受講している大学院生へのグループインタビューを通じて、受講動機、カリキュラムに対する満足度、課題など具体的な評価を明らかにし、今後、より充実したカリキュラムを作成するための参考素材として位置づけるものです。

【調査対象者】

上記事業の基盤的研究・人材育成拠点整備事業の採択拠点(政策研究大学院大学、東京大学、一橋大学、京都大学・大阪大学、九州大学)のうち、東京大学、京都大学、大阪大学で下記プログラムを受講している大学院生。

・東京大学「科学技術イノベーション政策の科学教育プログラム」
・大阪大学「公共圏における科学技術政策」
・京都大学「政策のための科学プログラム」

【調査項目】

・当該プログラムの受講動機
・当該プログラムの学びと経験を通じて研究を深めたいテーマ、もしくは社会で実践したいテーマ、仕事内容など
・当該プログラムに対する満足度・不満度、要望、課題など
・今後求める具体的な授業内容
・求めるインターンシップ先とその活動イメージ
・キャリアパス形成における要望、悩み、不安など

【調査手法】

◆対象者属性及びグループ数
・現在、当該プログラムを受講している下記大学の大学院生(各グループ 5～7 名程度)
・グループ数は下記のとおり
東京大学　２グループ
大阪大学　１グループ
京都大学　１グループ

◆対象者選定方法

当該プログラムを受講している大学院生を対象に、各大学から直接依頼。

◆実施方法

・所要時間は、90 分。

・グループインタビュー開始前に、簡単なフェイスシート(修士課程／博士課程、現在の専攻、出身大学など)に記入し、各参加者のバックグラウンドに留意しつつ、インタビューガイドに基づいて実施。

・各グループの発言録を分析し、なるべく多くのナマの意見、要望、課題などを抽出。

◆実施日程

大学	日時	場所
東京大学	①12 月 4 日(水)　18：30～20：00 ②12 月 11 日(水)　18：30～20：00	法学部１号館　演習室Ｂ－４
大阪大学	12 月 18 日(水)　14：30～16：00	ステューデント・コモンズ２F　マッチング型セミナー室(豊中キャンパス)
京都大学	12 月 19 日(木)　8：45～10：15	医学部 G 棟 3 階「政策のための科学」教室

【要約】

◆大阪大学

(1)本プログラムについての評価

本プログラムの主要な受講動機は、①自分自身の専攻以外への関心と社会での実効性に対する期待、②社会参画への関心と政策形成人材への志向、の２つが挙げられます。いずれも、「科学技術と社会のつながり」(科学技術と社会の架橋)というメッセージが共感を呼んでいました。

本プログラムの認知経路としては、大学院入学時に配布される副専攻、高度副プログラムを掲載したパンフレット、ポスター、教員からの紹介などであり、丁寧に解説された履修ガイドブック・シラバスへの評価も高い。

現在の教育プログラム内容については、全般的には、「楽しい」「面白い」「思考力がつく」など肯定的な評価が圧倒的に多い。具体的に評価できる要因として、科学技術・社会・政策のつながりを考えるさまざまなアプローチ、主専攻以外の幅広い内容、専門分野の異なる学生同士の交流などが挙げられています。

一方、多様な分野を網羅したカリキュラムは評価しつつも、「概論」というタイトルでありながら、実際はアラカルト的な内容であることなど、一部の科目には、タイトルと内容のミスマッチによる戸惑いも見られます。また、「公共政策」「科学技術政策」などについて、基礎的かつ体系的な内容で展開する授業の必要性も指摘されています。

なお、修了要件の 14 単位については、２年間という条件下では、おおむねそれほど負担感はないという意見が大勢を占めています。ただし時期や専攻(実験が多い専攻など)によっては負担が大きいという指摘もありました。

履修手続きについては、現行の方法、時期について、特に否定的な意見はありませんでした。

(2)今後の改善要望について

本プログラムの今後の改善要望としては、以下の点が指摘されました。

①他大学との連携強化

同様の教育プログラムを実施する他の大学との連携は大切だと感じられているが、現実的には、京大をはじめ、他大学との連携は限られており、今後の改善が求められています。なお、連携方法改善の一環として、現在、阪大で実施されている「科学技術イノベーション政策特別演習」を隔年ごとに、阪大、京大で交互に実施する案も出されました。また、時間的・物理的制約を超えた学びを可能にするネット授業を求める意見もありました。

②「公共圏における科学技術政策」の基礎ベースの共有化

CSCD で開設されている授業、各研究科で開設されている授業による個性の差もあるが、全般的には、「公共圏」「公共政策」「科学技術政策」などの基礎について、体系的に学びたいというニーズがかなり強くあります。そのため、一部の科目によっては、シラバスの記載と実際の授業内容にミスマッチも感じられていることから、この点での改善が望まれています。

◆京都大学

(1)本プログラムについての評価

本プログラムの主要な受講動機は、自分自身の専門性をふまえながら、さらに多面的な視野を広げ、科学技術を現代社会に適応させるための課題解決手法を学びたいという意識が目立ちます。特に、一度実社会で働いた経験を持つ学生は、改めて、異分野同士の連携・協働のあり方、科学と社会のつながりの再認識の重要性を強く自覚しています。

上記の理由から積極的に本プログラムを受講している意欲的な学生たちのため、医学系研究科という枠を超えて、他研究科、他大と連携したプログラム自体の意義は評価されています。ただし、カリキュラムについては、必ずしも満足度は高くなく、下記の点が課題として抽出されています。

必修科目である「研究プロジェクト」は初年度でまだ前例がないため、①テーマ選択、②指導方法、③経済的負担のそれぞれについて不明瞭であることに、かなり強い不安感と負担感を受講生が感じていました。また、選択科目においては医学系研究科と他研究科とでは、ハードルの高さの違いから、その評価が二分される傾向がありました。前者では、自らの専攻に近い他領域を幅広く学べる点に満足感が感じられているが、後者では、講義内容の専門性、専門用語の難解さなどから、受講の負担が感じられると指摘されました。

(2)今後の改善要望について

本プログラムの今後の改善要望としては、以下の点が指摘されました。

①「政策のための科学」の基礎ベースの共有化

多様な分野をつなぐ「政策のための科学」というプログラムの意義は理解されているが、拡散しすぎているため、全体体系の可視化と各分野をつなぐ横軸の提示が求められています。また、「政策のための科学」の基礎を学ぶための入門的な授業設置の高いニーズがあります。

②「政策のための科学」に合致した内容の充実と選択肢の多様化

初年度の試行錯誤的なプログラムであることは理解されており、今後は、テーマ設定、カリキュラムなどについて医学系研究科以外の選択の幅の拡大を求める意見も目立ちました。

③コミュニケーション力を育てる実践的な教育方法の拡充

全般的に、授業の中で、ディスカッションやグループワークの機会の少なさ、時間の短さが指摘されました。特に、阪大とのディスカッション型授業では、コミュニケーション力不足が強く実感されており、今後の授業の中で改善が望まれています。

④学生の意見のフィードバックの具現化

本プログラムへの直接の評価ではありませんが、授業評価アンケートなどの結果がどのようにフィードバックされるのかについての関心が高かったことを付記しておきます。

4. 関西ネットワークの発展

4. 関西ネットワークの発展

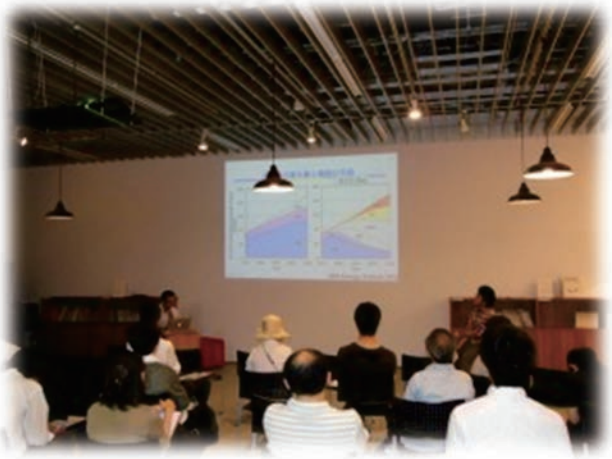
ラボカフェ

ラボカフェとは、大阪大学が社会の様々な組織や個人とのコラボレーションを通じて、主題に応じた対話を繰り広げる社学連携事業です。平日夜を中心に、哲学、アート、サイエンス、減災、医療等、多岐に渡るテーマに基づき、対話、レクチャー、アートイベント等の様々なプログラムを実施しています。

STiPS では、科学技術が社会にとってより良いものとして発展していく条件とは何か？ 各界で活躍するフロントランナーをお招きし、「社会の中のイノベーション」 という観点から刺激的な時を共有する「シリーズ：科学技術イノベーション」を昨年度に引き続き開催しました。

「シリーズ：科学技術イノベーション」第 6 回開催

○日時：6 月 20 日（木）19:00-21:00
○場所：アートエリア B1（大阪市北区中之島 1−1−1、京阪電車なにわ橋駅地下 1F コンコース）
○定員：50 名程度（当日先着順・入退場自由）
○ゲスト：梅田靖（大阪大学工学系研究科兼 CEIDS 教授）
○タイトル：サステナビリティとイノベーション
○カフェマスター：神里達博（大阪大学 CSCD 教員）
○主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS、大阪大学・京都大学連携プログラム）



2013 年 6 月 20 日[木]、今年度、最初のラボカフェ「シリーズ：科学技術イノベーション」をアートエリア B1 にて開催しました。

ゲストは、大阪大学工学系研究科、兼、環境イノベーションデザインセンター教授の梅田靖さん。タイトルは「サステナビリティとイノベーション」でした。大雨にも関わらず、のべ 20 人ほどの参加者に集まって頂けました。ありがとうございました。

「どのレベルのサステナビリティを目指すか（範囲、期間、生活レベル）」、「目指すべき社会や個人の将来像は何か」といった話題や、それらの実現に向けたメゾ領域研究（社会のビジョンと、個々の科学・技術シーズを効果的に結び付けるための理論的・実践的研究）の可能性に関する話題など、大変幅広く、刺激に富んだ内容のカフェとなりました。

「シリーズ：科学技術イノベーション」第７回開催

○日時：2013 年 8 月 8 日（木）19:00-21:00
○場所：アートエリア B１（大阪市北区中之島 1−1−1、京阪電車なにわ橋駅地下１F コンコース）
○定員：50 名程度（当日先着順・入退場自由）
○ゲスト：今里滋(同志社大学政策学部・大学院総合政策科学研究科教授)
○タイトル：ソーシャル・イノベーション
○カフェマスター：神里達博（大阪大学 CSCD 教員）
○主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS、大阪大学・京都大学連携プログラム）

2013 年 8 月 8 日[木]、CSCD のレクチャー＆対話イベント「ラボカフェ」において、STiPS が主催となり「シリーズ：科学技術イノベーション」第７回「ソーシャル・イノベーション」を開催いたしました。

ゲストは、同志社大学政策学部・大学院総合政策科学研究科教授の今里滋さん。タイトルは、近年注目が集まる「ソーシャル・イノベーション」です。大変暑い中、総計 20 人を超える参加者に集まって頂けました。ありがとうございました。

ご自身の経験談にあった「自前の公共空間を持つことで、人が集まり、議論が生まれ、アイデアが創発し、行動に至り、それがまた新たな人を呼んでいく」というプロセスが、印象に残っています。社会的課題を解決し、新しい社会的価値を生み出すことの難しさと楽しさを実感しました。また科学技術との関連では、原子力発電所事故の経験から学ぶことの重要性や、インターネットによる世界規模のソーシャル・イノベーションの可能性などについて議論が行われました。

「シリーズ：科学技術イノベーション」第 8 回開催

○日時：2013 年 10 月 24 日（木）19:00-21:00
○場所：アートエリア B 1（大阪市北区中之島 1−1−1、京阪電車なにわ橋駅地下 1 F コンコース）
○定員：50 名程度（当日先着順・入退場自由）
○ゲスト：八代嘉美（京都大学 iPS 細胞研究所 上廣倫理研究部門 特定准教授）
○タイトル：生命科学のイノベーション
○カフェマスター：神里達博（大阪大学 CSCD 教員）
○主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS、大阪大学・京都大学連携プログラム）

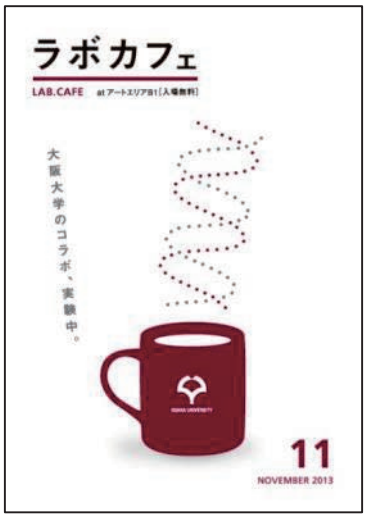
2013 年 10 月 24 日[木]、CSCD のレクチャー＆対話イベント「ラボカフェ」において、STiPS が主催となり「シリーズ：科学技術イノベーション」第 8 回「生命科学のイノベーション」を開催いたしました。

ゲストは、京都大学 iPS 細胞研究所 上廣倫理研究部門 特定准教授の八代嘉美さん。山中教授のノーベル賞受賞で注目された iPS 細胞をはじめとした、生命科学のイノベーションです。台風が接近し、足元が悪い中、27 人の参加者が集まって下さいました。ありがとうございました。

iPS 細胞の基礎的な話から、生命倫理や関連ビジネスの話まで、軽妙な話術で、コンパクトに分かり易くご講演頂きました。幅広く、かつ、密接に関連し合う複雑な話でしたが、多くの参加者が熱心にノートをとっていたのが印象的でした。議論の中にもありましたが、iPS 細胞には大きな可能性があるがゆえに、その社会的影響も十分に考えなければなりません。その社会的影響について、市民は専門家に期待を寄せるだけでなく、専門家と共に考えることが必要です。今回のラボカフェが、そのきっかけになることを願っています。

「シリーズ：科学技術イノベーション」第 9 回開催

○日時：2013 年 11 月 22 日（金）19:00-21:00
○場所：アートエリア B１（大阪市北区中之島 1−1−1、京阪電車なにわ橋駅地下 1 F コンコース）
○定員：50 名程度（当日先着順・入退場自由）
○ゲスト：松原洋子（立命館大学教授）
○タイトル：「電子書籍のアクセシビリティ -バリアフリーのためのイノベーション-」
○カフェマスター：神里達博（大阪大学 CSCD 教員）
○主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS、大阪大学・京都大学連携プログラム）



2013 年 11 月 22 日[金]、CSCD のレクチャー＆対話イベント「ラボカフェ」において、STiPS が主催となり「シリーズ：科学技術イノベーション」第 9 回「電子書籍のアクセシビリティ -バリアフリーのためのイノベーション-」を開催いたしました。

ゲストは、立命館大学教授の松原洋子さん。今回は、先生がリーダーを務める IRIS（http://r-iris.jp/）プログラム（電子書籍普及に伴う読書アクセシビリティの総合的研究）の紹介を中心に話題提供して頂きました。一段と冷え込みが厳しくなる中、10 名を超える参加者に来て頂きました。ありがとうございました。

書籍のバリアフリー化に向けて、今後日本でも普及が見込まれる電子書籍が注目されています。技術の発展により、テキストデータさえあれば、読み上げや点字への変換は自動化できるようになっており、今、関連する制度を整えれば一気にバリアフリー化する可能性があります。しかし技術的に可能であっても、書籍に関連するビジネスや文化、法律との折り合いをつけるのが難しいのが現状です。ある技術的なイノベーションが普及するには、社会の側にも変化が求められることを痛感させられました。参加者の中に印刷関連の方もいて、出版業界の事情も垣間見ることができ、まさに科学技術と社会の接点となるイベントとなりました。

5. 拠点間共同プログラムへの参画

5. 拠点間共同プログラムへの参画

サマーキャンプの設計

大阪大学は、拠点間共同プログラム「科学技術イノベーション政策における『政策のための科学』基盤的研究・人材育成拠点 2013 年度サマーキャンプ」のグループワーク部分メインデザインを担当しました[2]。

目標

全拠点の教員や学生が一堂に参集し、各拠点での取組をお互いが理解し合うとともに、共通のテーマでの討論や成果の共有、異分野交流などを行い、ネットワークを構築することを目的とする。

体制

主催：
政策研究大学院大学 科学技術イノベーション政策プログラム（GIST）

共催：
東京大学 科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」教育・研究ユニット
一橋大学 イノベーションマネジメント・政策プログラム
大阪大学*・京都大学 公共圏における科学技術・教育研究拠点
（*グループワーク部分メインデザイン担当）
九州大学 科学技術イノベーション政策教育研究センター

スケジュール

8 月 23 日	
13：00－13：15	開会式（開会挨拶、来賓挨拶）
13：15－14：05	講演 1「現役行政担当者からの SciREX への期待」＊質疑応答含む
14：05－14：55	講演 2「大型研究プロジェクトの課題」＊質疑応答含む
14：55－18：30	研究施設見学（KEK）＊見学時間 100 分。前後に移動／休憩
18：30－20：30	懇親会

8 月 24 日	
09：00－11：00	学生研究発表 ＊12 分発表、8 分質疑応答で 6 名
11：00－12：00	昼食
12：00－13：00	グループワーク・ガイダンス
13：00－15：00	グループワーク：問題設定

[2] 本実践の設計担当としての振り返りは、山内保典・神里達博（2014）「大学間連携教育の実践：政策のための科学『サマーキャンプ 2013」の教訓』」Communication-Design10,p37-56.を参照して下さい。

15：00－17：00	グループワーク：政策案のラフスケッチ
17：00－19：00	「専門家」との議論
19：00－20：00	夕食
20：00－22：00	ブラッシュアップ（任意）

8 月 25 日	
08：30－10：00	グループ：発表準備
10：00－12：30	発表会 ＊各グループ 30 分程度（質疑応答込み）
12：30－13：30	昼食 ＊別室にて審査
13：30－15：00	閉会式（講評と表彰、閉会挨拶）

共催：国際シンポジウム 2013

科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」基盤的研究・人材育成拠点 国際シンポジウム 2013「科学技術イノベーションにおけるガバナンス：現在の課題と政策選択」を共催しました。

日時：2013 年 10 月 2 日（水）9：30〜17：00
会場：東京大学本郷キャンパス　弥生講堂・一条ホール

概要（イベント告知文より）

エビデンスに基づく科学技術イノベーション（STI）政策を促進するためには、社会から真に求められる政策の立案と決定を実現できる「ガバナンス」の構築が不可欠です。エビデンスに基づく STI 政策のガバナンスをみなさまとご一緒に議論する場として、本シンポジウムを開催します。

エビデンスに基づく STI 政策の構築に関する最新の課題について、海外からお招きする先生方やパネリストの皆様にご議論いただきます。本シンポジウムで取り上げる主なテーマは以下の通りです。

1) 政策過程で考慮するエビデンスをどのように判断するか？
2) STI 政策の検討と決定において、どのような形でエビデンスとりまとめ、意思決定の根拠とするのか？
3) エビデンスに基づく STI 政策の立案に必要な知識とスキルを兼ね備えた人材をいかに育成するか？

プログラム

午前の部

開会挨拶	09：30－09：45	城山英明（東京大学公共政策大学院 教授/東京大学政策ビジョン研究センター センター長）
来賓挨拶	09：45－10：00	土屋定之（文部科学省 科学技術・学術政策局長）
セッション 1：Organization for innovation（10：00－12：15）		
	10：00－10：40	講演：“Triple Helix：the Role of University in Development” 講演者：Henry Etzkowitz（トリプルヘリックス研究所 所長、アメリカ）
	10：40－10：50	コメント コメンテーター：Jan Staman（ラテナウ研究所 所長、オランダ）
	10：50－11：05	休憩
	11：05－11：40	講演：“The Science of Science and Innovation Policy：Opportunities and Challengesat NSF” 講演者：Joshua Rosenbloom（米国国立科学財団 ディレクター、アメリカ）
	11：40－12：15	講演：“The role of venture capital for the governance of innovative young firms：Evidence from Europe” 講演者：Massimo Colombo （ミラノ工科大学 教授、イタリア）

午後の部

セッション 2：Linking Science, Society, and Policy（13：30 − 15：35）		
	13：30 − 14：05	講演：“Technology Assessment for Responsible Innovation” 講演者：Michael Decker（カールスルーエ工科大学 教授、ドイツ）
	14：05 − 14：40	講演：“Scientific advice and policy making in the Netherlands” 講演者：Annick de Vries （ラテナウ研究所 上席研究員、オランダ） Kay van de Linde（プレスストラテジー、所長、オランダ）
	14：40 − 15：20	Special session on risk communication governance in EU and China 講演者：Peter Wiedemann（カールスルーエ工科大学 教授、ドイツ） Zhao Yandong（科学発展戦略研究員 上席研究員、中国）
	15：20 − 15：35	休憩
セッション 3：Wrapping-up：イノベーションにおけるガバナンス（15：35-17：00）		
	15：35 − 17：00	コメンテーター 小林傳司教授（大阪大学）、永田晃也教授（九州大学）
		パネリスト Henry Etzkowitz 所長, Joshua Rosenbloom ディレクター, Massimo Colombo 教授, Michael Decker 教授, Annick de Vries 研究員, Kay van de Linde 所長, Peter Wiedemann 教授, Zhao Yandong 研究員
		モデレーター 城山英明 教授
閉会		

総合司会：松浦正浩 東京大学公共政策大学院特任准教授

詳細は、下記からご覧ください。

http://stig.jp/scirex2013/

6. 政策のための科学に関連する活動

6. 政策のための科学に関連する活動

2013 年度の政策のための科学に関連する活動のリストを掲載します。なお、リストアップの方針が大阪大学と京都大学では異なりますので、それぞれの方針を一読した上でご覧ください。

大阪大学のリストアップ方針

大阪大学の活動リストは、定例ミーティング（本冊子 20 ページ参照）構成員の「政策のための科学」に特に関連する活動について掲載いたしました。

著書、論文等

小林傳司．2013.「序論：知の変貌と大学の公共性」、広田照幸、吉田文、小林傳司、上山隆大、濱中淳子　編、『シリーズ大学研究する大学―何のための知識か』岩波書店 1－34 ページ

小林傳司．2013.「エンタープライズとしての科学技術」」『アスティオン』078 号　110－124 ページ

平川秀幸．2014.「科学的助言のパラダイム・シフト―責任あるイノベーション，ポスト・ノーマルサイエンス，エコシステム」，『科学』2014 年 2 月号（Vol.84 No.2，特集「科学的助言：科学と行政のあいだ」），195-201 頁.

平川秀幸．2013.「信頼に値する専門知システムはいかにして可能か―『専門知の民主化／民主政の専門化』という回路」，尾内隆之・調麻佐志編『科学者に委ねてはいけないこと―科学から「生」をとりもどす』，岩波書店，112-119 頁.

八木絵香．2013.「第 12 章　リスク・コミュニケーションとヒューマンファクターズ」篠原一光・中村隆宏（編）『心理学から考えるヒューマンファクターズ　安全で快適な新時代へ』有斐閣

八木絵香，山内保典．2013.「論争的な科学技術の問題に関する『気軽な』対話の場づくりに向けて:生物多様性をテーマとしたプログラムの開発を例に」『科学技術コミュニケーション』13，72-86

八木絵香．2013．実践者と研究者のあいだにある＜私＞，質的心理学フォーラム，　4，36-46

八木絵香．2013.「『第三者による検証』という言葉をとらえ直す―事故や災害の検証を行うべきは『誰』なのか」『α-Synodos』vol.124

八木絵香．2013.「放射線（原子力）教育を考える―「自ら考え、判断する力」を身につけるために―」『Rimse』5，11-14，（財）理数教育研究所

八木絵香．2013.「市民の傍らにいる専門家に求められること～エネルギー・環境をめぐる「国民的議論」を事例として」『アルパックニュースレター』179，株式会社地域計画建築研究所

八木絵香．2013.「エネルギー政策における国民的議論とは何だったのか」『日本原子力学会誌』55 (1)，29-34

林紀行，前田和久，八木絵香，松本めぐみ，谷口敏淳，宇留島隼人，平井啓，足立由香，谷向仁，伊藤和憲，川口裕子，渡辺眞実，福田文彦，石崎直人，上島悦子，阪上未紀，坂本淑子，岩田昌美，伊藤壽記．2013.「大規模災害の後遺障害に対する統合医療的アプローチ」日本統合医療学会誌, Vol.6, No.1，1-5

八木絵香．2013.「今，必要とされるのは「コミュニケーション」なのか」『日本原子力学会誌』56（3），62-63

神里達博．2014.「I 総論 1.化学技術と社会」『化学便覧・第七版』丸善出版

神里達博．2013.「放射線とベンゼンを例にみる規制と科学観―社会的受忍レベルの裂け目」『科学』，Vol.83, No.11, pp1256-1258.

神里達博．2014．文明探偵の冒険(午の巻)「『丙午大地震』の風説」，『本』講談社,Vol.39(3),pp.34-41.

神里達博　2014．文明探偵の冒険(巳の巻)「地震はなぜ予知できないか」,『本』講談社,Vol.39(2),pp.28-35.

神里達博．2014．文明探偵の冒険(辰の巻)「科学と宗教のあいだ」，『本』講談社,Vol.39(1),pp.28-35.

神里達博．2013．文明探偵の冒険(卯の巻)「作為か観察かそれとも……」，『本』講談社,Vol.38(12),pp.28-35.

神里達博．2013．文明探偵の冒険(寅の巻)「時代の節目としてのオリンピック」，『本』講談社,Vol.38(11),pp.22-29.

神里達博．2013．文明探偵の冒険(丑の巻)「リスク社会の占い」，『本』講談社,Vol.38(10),pp.14-21.

神里達博．2013．文明探偵の冒険(子の巻)「暦とは何か」，『本』講談社,Vol.38(9),pp.6-13.

神里達博．2013.「隕石」，『本』，講談社,Vol.38(4), pp.26-29.

山内保典．2013.「参加型手法ポータルサイトの構築：「でこなび」利用の手引き」『Communication-Design』9 巻：73-84.

山内保典，神里達博．2014.「大学間連携教育の実践－政策のための科学「サマーキャンプ 2013」の教訓」『Communication-Design』10 巻：37-56.

社会貢献

平川秀幸．文部科学省　産業連携・地域支援部会 イノベーション対話促進作業部会委員（2013 年 3 月～現在）

平川秀幸．滋賀県原子力防災専門家会議委員（2013 年 4 月～現在）

平川秀幸．文部科学省　安全・安心科学技術及び社会連携委員会 リスクコミュニケーションの推進方策に関する検討作業部会委員（2013 年 4 月～現在）

平川秀幸．大阪いずみ市民生活協同組合理事（2013 年 6 月～現在）

平川秀幸．大阪府食の安全安心推進協議会委員（2007 年 7 月～現在）

平川秀幸．朝日新聞論壇時評委員会委員（科学担当）（2011 年 6 月～現在）

平川秀幸．（独）科学技術振興機構（JST）科学コミュニケーションセンター・フェロー（2012 年 4 月～現在）

八木絵香．独立行政法人日本原子力研究開発機構「地層処分研究開発・評価委員会」委員（2011 年 7 月 1 日～現在）

八木絵香．JST「科学コミュニケーションセンター」フェロー（2012 年 5 月 1 日～現在）

八木絵香．関西広域連合「関西広域防災計画策定委員会　原子力災害対策専門部会」委員（2012 年 5 月 21 日～現在）

八木絵香．滋賀県「滋賀県防災会議」委員（2013 年 3 月 1 日～現在）

八木絵香．文部科学省「科学技術・学術審議会」専門委員（2013 年 3 月 1 日～現在）

八木絵香．関西広域連合「関西広域防災計画策定委員会　新型インフルエンザ対策専門部会」委員（2013

年 3 月 13 日～現在）

八木絵香．独立行政法人日本原子力研究開発機構「もんじゅ安全委員会」委員（2013 年 3 月 28 日～現在）

八木絵香．滋賀県「国民保護協議会」委員（2013 年 5 月 1 日～現在）

八木絵香．大阪府「大阪府新型インフルエンザ等対策審議会」委員（2013 年 5 月 29 日～現在）

八木絵香．経済産業省「総合資源エネルギー調査会」専門委員（2013 年 6 月 27 日から現在）

八木絵香．一般社団法人原子力安全推進協会「原子力発電所運転責任者講習」講師（2012 年 8 月 9 日～現在）

八木絵香．研修講師「全国科学館連携協議会主催：全国科学館連携協議会第 2 回国内研修」（2013 年 2 月 12 日　於：兵庫県立人と自然の博物館）

八木絵香．研修講師「静岡市立静岡科学館主催：静岡科学館科学コミュニケーター育成講座」（2013 年 6 月 2 日　於：静岡市立静岡科学館）

八木絵香．経済産業省「総合資源エネルギー調査会」専門委員（2013 年 6 月 27 日～2014 年 3 月 31 日）

八木絵香．シンポジウムファシリテーター「資源エネルギー庁主催：双方向シンポジウム　どうする高レベル放射性廃棄物」（2014 年 2 月 16 日、3 月 1 日　於：田中田村町ビル会議室））

神里達博．科学技術社会論学会　学会誌　編集委員（継続）

神里達博．朝日新聞社「未来への発想委員会(旧ガバナンス懇談会)」委員（継続）

アウトリーチ活動等

小林傳司．2013.「つなぐ・超える・変える　～課題先進国日本の『課題』～」（招待）、ファシリテーションシンポジウム、日本ファシリテーション協会

小林傳司．2013.「科学哲学からの問題提起－Transdisciplinary Research の必要性」（招待）、学術会議フォーラム「Future Earth：持続可能な未来の社会へ向けて」日本学術会議

小林傳司．2013.「トランスサイエンスの時代－科学技術と社会の新しい関係－」（招待）、国立障害者リハビリテーションセンター自立支援局

小林傳司．2013.「教養教育は何の役に立つのか」となぜ問われるのか？（招待）、日本学術会議主催学術フォーラム「教養教育は何の役に立つのか」、日本学術会議講堂

小林傳司．2013.「大学は教養を授ける機関である」と言うために（招待）、上智大学創立 100 周年・岩波書店創業 100 年記念シンポジウム、「グローバル時代における日本の大学を考える」、上智大学

小林傳司．2013.「繋ぐ力、超える力を育てる：大阪大学の試み」（招待）、産学フォーラム（帝国ホテル）

小林傳司．2013.「STS とは何か」（招待）、九州大学　2013 年度 科学技術イノベーション政策専修コース－科学技術社会論概説 開講記念特別セミナー

小林傳司．2013.「知の構造転換と大学の役割」（招待）、統合学術シンポジウム、ミュンヘン工科大学

小林傳司．2013.「パブリックコンサルテーションの可能性」（招待）、NHK 放送文化研究所

小林傳司．2013.「大学院での教養教育：理想と現実－大阪大学リーディング大学院の取り組み」（招待）総合研究大学院大学

小林傳司．2013.「科学と法の界面で考えるべき問題～科学技術社会論の立場から～」（招待）、平成 25 年度特別研究会「第六回複雑困難訴訟」司法研修所

平川秀幸．2013.「エラーはつきもの、の弊害」,『朝日新聞』論壇時評「あすを探る」，2013 年 12 月 19 日朝刊 17 面.

平川秀幸．2013.「いま再び『影』を見つめよう」,『朝日新聞』論壇時評「あすを探る」，2013 年 6 月 27 日朝刊 15 面.

平川秀幸．2013.「リスクコミュニケーション～リスクと科学とどうつきあうか？～」，平成 25 年度 大阪府立大学公開講座　消費者力育成セミナー，大阪府立大学，2013 年 12 月 9 日.

平川秀幸．2013.「遺伝子組換え食品について」，大阪いずみ市民生活協同組合 2013 年度組合員理事懇談会，大阪いずみ市民生活協同組合，2013 年 8 月 26 日.

平川秀幸．2013.「放射線・原発のリスク問題をどう語り、どう対処するか？」，神戸学生青年センター「食料環境セミナー」，神戸学生青年センター，2013 年 7 月 24 日.

平川秀幸．2013.「そもそも『科学』って何？―『科学的に考える』とは～《社会的行為としての科学》の視点から」，PARC 自由学校 2013 文系アタマで「科学」を考える，特定非営利活動法人 アジア太平洋資料センター（PARC）・自由学校，2013 年 6 月 11 日.

八木絵香.「原子力をめぐる対話とファシリテーション」『対話イベント日本語を衆議する／日本語で衆議する』(2013 年 7 月 1 日　於：大阪大学豊中キャンパス)

八木絵香.「『「科学的根拠」という言葉をとらえ直す―被害当事者の語りから―』『けいはんな文化・科学コミュニケーション推進協議会第２回公開シンポジウム　科学を身近に引き寄せる～新しい科学コミュニケーションの創造～』(2013 年 10 月 26 日　於：国際高等研究所 レクチャー・ホール)

神里達博．2014.（未来への発想委員会）地方分権を問い直す：下『朝日新聞』,3 月 8 日,朝刊 15 面

神里達博．2013.（未来への発想委員会）負担増を捉えなおす：上『朝日新聞』,12 月 2 日,朝刊 9 面

神里達博．2013.（ニッポン前へ　視点：８）増えていないか「そうは言っても」『朝日新聞』,4 月 24 日,朝刊 17 面

神里達博．2014.（東日本大震災３年）リスクと向き合う　大阪大学特任准教授・神里達博さん『朝日新聞』,3 月 5 日,朝刊 15 面

神里達博．2013. 原発汚染水問題他『サンデーモーニング』(TBS テレビ),7 月 16 日放送

神里達博．2014. 食品問題－BSE，最高裁判所／司法研修所・平成 25 年度特別研究会（第 6 回，複雑困難訴訟）(和光・司法研修所)

神里達博．2014.「リスク」とは何か，全国国立大学放射線技師長会［基調講演］(吹田・大阪大学)

神里達博．2013. リスクとは何か，放射線安全フォーラム市民公開講座［招待講演］(東京・お茶の水女子大学)

神里達博．2013. 私たちは「リスク」とどう向き合うべきなのか？―科学技術と政治の谷間で，特定非営利法人 PARC 自由学校・「文系アタマで「科学」を考える」（東京・PARC 自由学校）

Yasunori YAMANOUCHI “Providing Support to the General Public by Communication Design: A Case Study of Participatory Technology Assessment” Tokyo International symposium “Activating Inspiration & Creativity”, at The University of Tokyo, 9-10, Nov. 2013.

辻田俊哉．2014.「適正技術について考える」『ラボカフェ／オルタナティブカフェ』大阪・アートエリア B１，2014 年 1 月 24 日.

辻田俊哉．2014.「大阪大学の取り組み―Design for Life 地域が変わるものづくり」『ソーシャル・イノ

ベーション講演会』大阪大学サイエンス・テクノロジー・アントレプレナーシップ・ラボラトリー（e-square），2014 年 2 月 8 日.

京都大学のリストアップ方針

京都大学の活動リストは、参画教員の政策のための科学に関係する活動について掲載いたしました。

著書、論文等

川上浩司．2013.「朝倉正紀企画：循環器病学における臨床研究-いかに確実に臨床に還元するか-」，医学のあゆみ, 244（13），1093-1097.

川上浩司. 2013．医療イノベーションにおける創薬の出口戦略．医薬ジャーナル増刊号「新薬展望 2013」，49（s-1），25－29.

川上浩司．2013．「薬事申請を成功させるポイント：FDA 編」欧米中の薬事申請と関連書類事例.技術情報協会, pp260－266.

川上浩司．2013．「薬事から見た再生医療周辺技術とバイオマテリアル」幹細胞医療の実用化技術と産業展望（江上 美芽・水谷 学監修），　シーエムシー出版, pp11-15, 3 月.

Masayuki Kohno, Koji Ohara, Tomohisa Horibe, and Koji Kawakami. Inhibition of neurite outgrowth by neuropilin-1 binding peptide derived from semaphorin 3A. International Journal of Peptide Reseach and Therapeutics, in press, 2013.

Yoshie Onishi, Shiro Hinotsu, Toshiaki A. Furukawa, and Koji Kawakami. Psychotropic prescription patterns among patients diagnosed with depressive disorder based on claims database in Japan. Clinical Drug Investigation, 33: 597-605, 2013.

Shota Hamada, Akiko Shibata, Hisashi Urushihara, Shintaro Sengoku, Chihiro Suematsu, and Koji Kawakami. Transaction cost analysis of new drug application affairs in Japan: a case study of a multinational pharmaceutical company. Therapuutic Innovation & Regulatory Science, in press, 2013.

Hanae Ueyama, Shiro Hinotsu, Hisashi Urushihara, Masaki Nakamura, Yuji Nakamura, and Koji Kawakami. Signal detection using administrative database: a self-controlled case-series study in Japan. Drug Safety, in press, 2013.

Yukie Yamauchi, Yumie Kawashima, Hisashi Urushihara, Fumiyo Kita, Yasutoshi Kobayashi, Shiro Hinotsu, Masao Nakagawa, and Koji Kawakami. Survey to physician toward their understanding of regulatory environment of clinical trials in Japan. General Medicine, in press, 2013.

Nobuyoshi Takabayashi, Hisashi Urushihara, and Koji Kawakami. Biased safety reporting in blinded randomized clinical trials: meta-analysis of angiotensin receptor blocker trials. PLoS ONE, 8(9): e75027. doi:10.1371/journal.pone.0075027, 2013.

Shinya Ohno, Shiro Hinotsu, Kyoko Murata, and Koji Kawakami. A survey of non-small cell lung cancer patients with meningeal carcinomatosis in Japan: incidence and medical resourse

consumption. Advances in Pharmacoepidemiology and Drug Safety, 2: 133. doi:10.4172/2167-1052.1000133, 2013.

Koji Ohara, Masayuki Kohno, and Koji Kawakami. Localization of the anti-cancer peptide EGFR-lytic hybrid peptide in human pancreatic cancer BxPC-3 cells by immunohistochemistry. Journal of Peptide Science, 19: 511-515, 2013.

Koji Ohara, Masayuki Kohno, Tsutomu Hamada, and Koji Kawakami. Entry of a cationic lytic-type peptide into the cytoplasm via endocytosis-dependent and –independent pathways in human glioma U251 cells. Peptides, 50: 28-35, 2013.

Shiro Hinotsu, Junichi Yoshikawa, Kyoko Murata, Tomohisa Horibe, and Koji Kawakami. Effect of lectures by medical students on the awareness of lifestyle for elementary school students. Journal of Obesity & Weight loss Therapy, 3: 167. doi:10.4172/2165-7904. 1000167, 2013.

Toshi A. Furukawa, Yoshie Onishi, Shiro Hinotsu, Aran Tajika, Nozomi Takeshima, Kiyomi Shinohara, Yusuke Ogawa, Yu Hayasaka, and Koji Kawakami. Prescription patterns following first-line new generation antidepressants for depression in Japan: A naturalistic cohort study based on a large claims database. Jounal of Affective Disorders, 150: 916-922, 2013.

Shota Hamada, Shiro Hinotsu, Hiroshi Ishiguro, Masakazu Toi, and Koji Kawakami. Cross-national comparison of medical costs shared by payers and patients: a case of postmenopausal women with early-stage breast cancer based on assumption case scenarios and reimbursement fees. Breast Care, 8: 282-288, 2013.

Yoshie Onishi, Shiro Hinotsu, Yoko M. Nakao, Hisashi Urushihara, and Koji Kawakami. Economic evaluation of pravastatin for primary prevention of coronary artery disease based on risk prediction from JALS-ECC in Japan. Value in Health Regional Issues, 2: 5-12, 2013.

Kahori Seto, Junichi Shoda, Tomohisa Horibe, Eiji Warabi, Kazurori Ishige, Kenji Yamagata, Masayuki Kohno, Toru Yanagawa, Hiroki Bukawa, and Koji Kawakami. Interleukin-4 receptor alpha-based hybrid peptide effectively induces antitumor activity in head and neck squamous cell carcinoma. Oncology Reports, 29: 2147-2153, 2013.

Hironobu Tokumasu, Shiro Hinotsu, Fumiyo Kita, and Koji Kawakami. Predictive value of clinical chorioamnionitis in extremely premature infants. Pediatrics International, 55: 35-38, 2013.

Tonohisa Horibe, Aya Torisawa, Ryutaro Akiyoshi, Yoko Hatta-Ohashi, Hirobumi Suzuki, and Koji Kawakami. Transfection efficacy of normal and cancer cell lines and monitoring of promotor activity by single-cell bioluminescence imaging. Journal of Biological Chemical Luminescence, doi:10.1002/bio.2508, 2013.

Atsushi Ogawa, Shiro Hinotsu, and Koji Kawakami. Does late morning waking-up affect sleep during the following night in patients with primary insomnia? Biological Ryhthm Research, 44: 938-948, 2013.

Megumi Kawamoto, Tomohisa Horibe, Masayuki Kohno, and Koji Kawakami. HER2- targeted hybrid peptide that blocks HER2 tyrosine kinase, disintegrates cancer cell membrane and inhibits tumor growth in vivo. Molecular Cancer Therapeutics, 12: 384-393, 2013.

Megumi Kawamoto, Masayuki Kohno, Tomohisa Horibe, Koji Kawakami. Immunogenicity and toxicity of transferrin receptor-targeted hybrid peptide as a potent anticancer agent. Cancer Chemotherapy and Pharmacology, 71: 799-807, 2013.

Shinzo Hiroi, Kenkichi Sugiura, Kumi Matsuno, Masashi Hirayama, Kenji Kuriyama, Kohei Kaku, and Koji Kawakami. A multicentre, phase III evaluation of the efficacy and safety of a new fixed-dose pioglitazone/glimepiride combination tablet in Japanese patients with type 2 diabetes. Diabetes Technology and Therapeutics, DOI10.1089/dia.2012.0246, 2013.

Koji Ohara, Masayuki Kohno, Tomohisa Horibe, and Koji Kawakami. Local drug delivery to a human pancreatic tumor via a newly designed multiple injectable needle. Molecular and Clinical Oncology, 1: 231-234, 2013.

Hamada, S., Hinotsu, S., Ishiguro, H., Toi, M., and Kawakami, K. (2013) Cross-national comparison of medical costs shared by payers and patients: a study of postmenopausal women with early-stage breast cancer based on assumption case scenarios and reimbursement fees. Breast Care (in press).

Hinotsu, S., Yoshikawa, J., Murata, K., Horibe, T., and Kawakami, K. (2013) Effect of lectures by medical students on the awareness of lifestyle for elementary school students. J Obesity & Weight Loss Ther (in press).

Onishi, Y., Hinotsu, S., Nakao, Y.M., Urushihara, H., and Kawakami, K. (2013) Economic evaluation of pravastatin for primary prevention of coronary artery disease based on risk prediction from JALS-ECC in Japan. Value in Health Regional Issues (in press).

Ogawa, A., Hinotsu, S., and Kawakami, K. (2013) Dose late morning waking-up affect sleep during the following night in patients with primary insomnia? Biol Ryhthm Res (in press).

Hiroi, S., Sugiura, K., Matsuno, K., Hirayama, M., Kuriyama, K., Kaku, K., and Kawakami, K. (2013) A multicenter, phase III evaluation of the efficacy and safety of a new fixed-dose pioglitazone/glimepiride combination tablet in Japanese patients with type 2 diabetes. Diabetes Technol Ther 15, 158-165.

Hiroi, S., Matsuno, K., Hirayama, M., Hayakawa, T., Yoshioka, N., Kawakami, K. (2012) Bioequivalence of a pioglitazone-glimepiride combination tablet versus single-dose coadministration of pioglitazone and glimepiride in healthy Japanese subjects. Diabetes Manage 2 (5 Suppl. 1), 21-28

Hiroi, S., Matsuno, K., Hirayama, M., Hayakawa, T., Yoshioka, N., Kawakami, K. (2012) Bioequivalence evaluation of pioglitazone orally disintegrating tablet formulation. Diabetes Manage 2 (5 Suppl. 1), 3-11

Kobayashi, Y., Hayashino, Y., Takagaki, N., Hinotsu, S., Jackson, J.L., Kawakami, K. (2012) Diagnostic performance of chromoendoscopy and narrow band imaging for colonic neoplasms: meta-analysis. Colorectal Disease 14, 18-28

Tokumasu, H., Hinotsu, S., Kita, F., and Kawakami, K. (2013) Predictive value of clinical chorioamnionitis in extremely premature infants. Pediatr Int 55, 35-38.

長尾雅能，杉山綾香，足立由起，漆原尚巳，一山智，川上浩司．(2012) 京大病院における採血時フルネーム名乗らせ確認の遵守向上の取り組み．医療の質・安全学会誌，(JJQSH) 7(3), 228-234
宮野公樹．2014.「いきいき研究室コミュニケーション 研究推進と人材育成のポジティブな関係を求めて」人知能, pp. 72 – 77，1 月号.
カール・ベッカー．2013.「日本人の死生観と癒し」『日本精神保健看護学会誌』22 巻 2 号 109-116.
カール・ベッカー．2013.「他界の証拠?」『プルーフ・オブ・ヘブン』エベン・アレグザンダー著，白川貴子訳，早川書房，238-247.10 月.
カール・ベッカー．2013.「臨死体験と脳」『大法輪』80 巻 11 号、11 月、22-27.
カール・ベッカー．2014.「環境倫理と企業倫理」，木村武史編『現代文明の危機と克服』日本地域社会研究所出版，１５～３４頁，４月.
カール･ベッカー，戸松義晴，浅見昇吾．2013.「グリーフケアの課題と未来」『グリーフケア』上智大学グリーフケア研究所，102-126。
カール・ベッカー．2014.「新人看護師のストレス予防と SOC 改善調査」『こころの未来』2013 年 11 月 51 頁.
有田健一，カール・ベッカー．2014.「患者の意思を医療選択に生かすという文化の創生に向けて」『広島県医師会速報』18 頁，2014 年 1 月 5 日。
カール・ベッカー．2014.「異文化の仲で問われる医療者の死生観と日本人の経験知」『国際看護』2014 年 3 月 10 日 482 号、5-7 頁。
カール・ベッカー．2014.「選択肢～法律で明確化を」毎日新聞富山版，2014 年 3 月 18 日、26 頁。
Kazuko Hiyoshi-Taniguchi, Carl B. Becker, Ayae Kinoshita, (2013) “Social Workers Can Use Sense of Coherence to Predict Burnout of End-of-Life Care-Givers” British Journal of Social Work (May 30, 2013) pp. 1-15.
中嶋文子、カール・ベッカー、赤澤千春、寺口淳子、小野千秋、渡辺美佳、浜崎美子、栃岡千香子、東真理、山田利恵（2014）「早期離職した看護師のストレス対処能力と退職理由の関係について」『医療の広場』、54(4)、7-10.
Michiyo Ando, Felicia Marquez-Wong, Gary Simon, Haruko Kira, Carl Becker, (2014) “Bereavement Life Review Improves Families’ Spiritual Well-Being and Depression of American Caregivers” Palliative and Supportive Care ， 2. pp. 1-7. (March 10, 2014)
駒田安紀、近藤（有田）恵、赤澤千春、中嶋文子、カール・ベッカー（2014）「新人看護師のバーンアウトとソーシャルサポート源」『看護管理』, 24(4), 2-7.
糸島陽子、奥津文子、カール・ベッカー他（2014）「新卒看護師・看護師長のエンドオブライフに関する教育ニーズ」『人間看護学研究』25-32. 12 月.
中嶋文子、カール・ベッカー、赤澤千春、寺口淳子、小野千秋、渡辺美佳、浜崎美子、栃岡千香子、東真理、山田利恵．2013.「早期離職した看護師のストレス対処能力（SOC：Sense of Coherence：首尾一貫感覚）と退職理由の関係について」、公益財団法人　政策医療振興財団『研究助成事業報告書－看護－』、6 月.
有田健一、カール・ベッカー．2014.「患者の意思を医療選択に生かすという文化の創生に向けて」『広島県医師会速報』18 頁、1 月 5 日.

駒田安紀、カール・ベッカー．2013.「研究プロジェクト　治療者・社会・病に関する意識調査」『こころの未来』50 頁. 11 月.

ムニシ, H. I., イェン, L., ジョリベ, E., 仙石慎太郎（2013）「産学公連携コンソーシアムによるオープン・イノベーション—幹細胞技術の事例をもとにわが国の最適解を模索する—」，一橋ビジネスレビュー，63(3),68-85.

中辻憲夫, 淺田孝, 仙石慎太郎（2013）「ヒト多能性幹細胞（ES/iPS 細胞）の医療・創薬応用を目指す技術と政策－グローバルビューと海外動向」，再生医療，12(４)，316-341.

Watatani, K., Xie, Z., Nakatsuji, N., Sengoku, S. （2013）“Global Competencies from Regional Stem Cell Research: Bibliometrics for Investigating and Forecasting Research Trends”, Regenerative Medicine, 8(5), 659-668.

Hamada, S., Shibata, A., Urushihara, H., Sengoku, S., Suematsu, C., Kawakami, K.（2013）“Transaction Cost Analysis of the New Drug Application Process: A Case Study of a Multinational Pharmaceutical Company in Japan”, Therapeutic Innovation & Regulatory Science, 4(3) 371-377.

仙石慎太郎（2014）「幹細胞科学技術の統合的イノベーション・マネジメント研究と人材育成・事業化支援」，最先端・次世代研究開発支援プログラム（ライフイノベーション・人文社会科学分野），平成22～25 年度　研究開発成果報告書，2014/3/1.

Barfoot, J., Kemp E., Doherty, K., Blackburn, C., Sengoku, S., van Servellen, A., Garavi, A., Karlsson, A.（2013）“Stem Cell Research: Trends and Perspectives on the Evolving International Landscape”, Elsevier B. V., Amsterdam

Sengoku, S.“Innovation and Commercialization of Induced Pluripotent Stem Cells in Vertès”,(2013) A. A., Qureshi, N., Caplan, A. I., Babssis, L. (eds) Stem Cell in Regenerative Medicine: Science, Regulation and Business Strategies.Wiley, Chichester, （in press）

Naito M, Suzukamo Y, Wakai K, Azechi M, Kaneko F, Nakayama T, Hamajima N, Fukuhara S. “One-Year Period Prevalence of Oral Aphthous Ulcers and Oral Health-Related Quality of Life in Patients with Behçet's Disease”. Genet Res Int. 2014:930348.doi:10.1155/2014/930348. 2014

Igarashi T, Wakita M, Miyazaki K, Nakayama T.”Birth environment facilitation by midwives assisting in non-hospital births: A qualitative interview study.” Midwifery. Jul;30(7):877-84.2014

Asayama K, Satoh M, Murakami Y, Ohkubo T, Nagasawa SY, Tsuji I, Nakayama T, Okayama A, Miura K, Imai Y, Ueshima H, Okamura T; Evidence for Cardiovascular Prevention From Observational Cohorts in Japan (EPOCH-JAPAN) Research Group. “Cardiovascular risk with and without antihypertensive drug treatment in the Japanese general population: participant-levelmeta-analysis”.Hypertension.Jun;63(6):1189-97.doi:10.1161/HYPERTENSIONAHA.113.03206. 2014

Ito N, Nishiyama K, Callaway CW, Orita T, Hayashida K, Arimoto H, Abe M, Endo T, Murai A, Ishikura K, Yamada N, Mizobuchi M, Anan H, Okuchi K, Yasuda H, Mochizuki T, Tsujimura Y, Nakayama T, Hatanaka T, Nagao K; J-POP Registry Investigators. “Noninvasive regional cerebral oxygen saturation for neurological prognostication of patients with out-of-hospital

cardiac arrest: a prospective multicenter observational study". Resuscitation.Jun;85(6):778-84. doi: 10.1016/j.resuscitation.2014.02.012.2014

Urushihara H, Kobashi G, Masuda H, Taneichi S, Yamamoto M, Nakayama T, Kawakami K, Matsuda T, Ohta K, Sugimori H.Pharmaceutical company perspectives on current safety risk communications in Japan. Springerplus. 2014 Jan 24;3:51. doi: 10.1186/2193-1801-3-51.

Sengoku T, Matsumura K, Usami M, Takahashi Y, Nakayama T. Diagnostic accuracy of FDG-PET cancer screening in asymptomatic individuals: use of record linkage from the Osaka Cancer Registry.Int J Clin Oncol.2014 Feb 1.

Tabara Y, Muro S, Takahashi Y, Setoh K, Kawaguchi T, Terao C, Kosugi S, Sekine A, Yamada R, Nakayama T, Mishima M, Matsuda F; Nagahama Study Group. Airflow limitation in smokers is associated with arterial stiffness: the Nagahama Study. Atherosclerosis. Jan;232(1):59-64. doi: 10.1016/j.atherosclerosis.2013.10.020.

Greving JP, Wermer MJ, Brown RD Jr, Morita A, Juvela S, Yonekura M, Ishibashi T, Torner JC, Nakayama T, Rinkel GJ, Algra A.Development of the PHASES score for prediction of risk of rupture of intracranial aneurysms: a pooled analysis of six prospective cohort studies.Lancet Neurol.2014 Jan;13(1):59-66. doi: 10.1016/S1474-4422(13)70263-1Yamazaki T, Yamori M, Tanaka S, Yamamoto K, Sumi E, Nishimoto-Sano M, Asai K, Takahashi K, Nakayama T, Bessho K.Risk factors and indices of osteomyelitis of the jaw in osteoporosis patients: results from a hospital-based cohort study in Japan. PLoS One 2013 Nov 1;8(11):e79376. doi: 10.1371/journal.pone.0079376

Okamoto Y, Ohta N, Okano M, Kamijo A, Gotoh M, Suzuki M, Takeno S, Terada T, Hanazawa T, Horiguchi S, Honda K, Matsune S, Yamada T, Yuta A, Nakayama T, Fujieda S. Guiding principles of subcutaneous immunotherapy for allergic rhinitis in Japan. Auris Nasus Larynx 2014 Feb;41(1):1-5. doi: 10.1016/j.anl.2013.06.003

Ichikawa K, Takahashi Y, Ando M, Anme T, Ishizaki T, Yamaguchi H, Nakayama T. TEACCH-based group social skills training for children with high-functioning autism: a pilot randomized controlled trial.Biopsychosoc Med 2013 Oct 1;7(1):14. doi: 10.1186/1751-0759-7-14.

Kanatani KT, Okumura M, Tohno S, Adachi Y, Sato K, Nakayama T. Indoor particle counts during Asian dust events under everyday conditions at an apartment in Japan. Environ Health Prev Med 2014 Jan;19(1):81-8. doi: 10.1007/s12199-013-0356-4

Amagasa T, Nakayama T. Relationship between long working hours and depression: a 3-year longitudinal study of clerical workers. J Occup Environ Med 2013 Aug;55(8):863-72. doi: 10.1097/JOM.0b013e31829b27fa.

Tominari S, Nakakura T, Yasuo T, Yamanaka K, Takahashi Y, Shirasaka T, Nakayama T. Implementation of mental health service has an impact on retention in HIV care: a nested case-control study in a japanese HIV care facility.PLoS One2013 Jul 29;8(7):e69603. doi: 10.1371/journal.pone.0069603.

Wada M, Nakayama T, Ishizaki T, Satoh T, Ikeda S. Practice patterns for lower respiratory tract

infections in hospital patients with particular focus on bacteriological examinations and injection antibiotics use.Int J Gen Med 2013 Jul 18;6:597-604. doi: 10.2147/IJGM.S44190

Tsuji Kanatani K, Slingsby BT, Mukaida K, Kitano H, Adachi Y, Haefner D, Nakayama T. Translation and linguistic validation of the Allergy-CONTROL-ScoreTM for use in Japan.Allergol Int2013 Sep;62(3):337-41. doi: 10.2332/allergolint.12-OA-0519

Yamazaki T, Yamori M, Asai K, Nakano-Araki I, Yamaguchi A, Takahashi K, Sekine A, Matsuda F, Kosugi S, Nakayama T, Inagaki N, Bessho K; Nagahama Study Collaboration Group.Mastication and risk for diabetes in a Japanese population: a cross-sectional study.PLoS One2013 Jun 5;8(6):e64113. doi: 10.1371/journal.pone.0064113

Suka M, Odajima T, Kasai M, Igarashi A, Ishikawa H, Kusama M, Nakayama T, Sumitani M, Sugimori H. The 14-item health literacy scale for Japanese adults (HLS-14). Environ Health Prev Med 2013 Sep;18(5):407-15. doi: 10.1007/s12199-013-0340-z.

Noda E, Mifune T, Nakayama T. Diabetes prevention information in Japanese magazines with the largest print runs. Content analysis using clinical guidelines as a standard.Nihon Koshu Eisei Zasshi.2013 Jan;60(1):3-9.2

Tabara Y, Takahashi Y, Kohara K, Setoh K, Kawaguchi T, Terao C, Igase M, Yamada R, Kosugi S, Sekine A, Miki T, Nakayama T, Matsuda F; Nagahama Study Group. Association of longer QT interval with arterial waveform and lower pulse pressure amplification: the Nagahama Study.Am J Hypertens.2013 Aug;26(8):973-80. doi: 10.1093/ajh/hpt052

Tabara Y, Takahashi Y, Setoh K, Muro S, Kawaguchi T, Terao C, Kosugi S, Sekine A, Yamada R, Mishima M, Nakayama T, Matsuda F; Nagahama Study Group. Increased aortic wave reflection and smaller pulse pressure amplification in smokers and passive smokers confirmed by urinary cotinine levels: the Nagahama Study.Int J Cardiol. 2013 Oct 3;168(3):2673-7. doi: 10.1016/j.ijcard.2013.03.028

Mori H, Nakayama T.Academic impact of qualitative studies in healthcare: bibliometric analysis.PLoS One. 2013;8(3):e57371. doi: 10.1371/journal.pone.0057371.

Yoshimura K, Nakayama T, Sekine A, Matsuda F, Kosugi S, Sugino Y, Yoshimura K, Ogawa O; Nagahama Cohort Research Group. Prevalence of postmicturition urinary incontinence in Japanese men: comparison with other types of incontinence.Int J Urol.2013 Sep;20(9):911-6. doi: 10.1111/iju.12074.

Higashi T, Nakamura F, Saruki N, Takegami M, Hosokawa T, Fukuhara S, Nakayama T, Sobue T.Evaluation of newspaper articles for coverage of public reporting data: a case study of unadjusted cancer survival data.Jpn J Clin Oncol. 2013 Jan;43(1):95-100. doi: 10.1093/jjco/hys190.

Ohwada H, Nakayama T, Tomono Y, Yamanaka K. Predictors, including blood, urine, anthropometry, and nutritional indices, of all-cause mortality among institutionalized individuals with intellectual disability.Res Dev Disabil.2013 Jan;34(1):650-5. doi: 10.1016/j.ridd.2012.10.006.

中山健夫. 2014. 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金第 4 次対がん総合戦略研究事業　国民のがん情報不足感の解消に向けた「患者視点情報」のデータベース構築とその活用・影響に関する研究　総括研究報告書 2014 年 3 月

中山健夫. 2014.　平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金　地域医療基盤開発推進研究事業　システマティックレビューを活用した診療ガイドラインの作成と臨床限座における EBM 普及促進に向けた基盤整備　総括研究報告書 2014 年 3 月

中山健夫. 2014.　平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金　地域医療基盤開発推進研究事業　システマティックレビューを活用した診療ガイドラインの作成と臨床限座における EBM 普及促進に向けた基盤整備　総合研究報告書 2014 年 3 月

中山健夫. 2014.　健康・医療の情報を読み解く　健康情報学への招待[第 2 版]　丸善

中山健夫(監修). 2014.　21 世紀医療フォーラム（編者）. 医療ビッグデータがもたらす社会変革　日経 BP 社

Miki Kioka, Koji Koyamada, "Usefulness of the international symposium on liberal arts and general education for the first year education", 初年次教育学会誌, Vol5, No.1, pp115-118, 2013.

Koji Koyamada, Nobuyuki Kukimoto, “Agenda Setting in Policy-Making Using Visualization Techniques”, 2014 IEEE Pacific Visualization Symposium,pp. 346-347,2014.

社会貢献

川上浩司. 文部科学省 大学発新産業創出拠点推進委員会専門委員

川上浩司. 文部科学省 リサーチ・アドミニストレーターを育成・確保するシステムの整備 推進委員会審査小委員会委員

川上浩司. 厚生労働省　戦略研究企画・調査専門検討会　委員

川上浩司. 農林水産省　生研センター　書類審査専門員

川上浩司. 独立行政法人 日本学術振興会　科学研究費委員会専門委員

川上浩司. 独立行政法人 科学技術振興機構　ACCEL 事業研究開発運営委員会委員

川上浩司. 独立行政法人 科学技術振興機構　国際科学技術協力推進委員（日本―南アフリカ協力に関する国際科学技術推進委員）

川上浩司. 京都市　関西国際戦略総合特別区域地域協議会京都市地区協議会委員

川上浩司. 神戸市　神戸医療産業都市推進協議会ビジョン改訂検討ワーキンググループ　委員

川上浩司. 神戸市　神戸医療産業都市推進協議会医療機器等事業化促進プラットフォーム委員会委員

川上浩司. 国立大学病院臨床研究推進会議幹事会幹事

川上浩司. 公益財団法人先端医療振興財団　臨床研究人材育成プログラム担当　客員部長川上浩司　日経 BP　21 世紀医療フォーラム　代表世話人（医師会議機構）

川上浩司. 一般社団法人　日本医工ものづくりコモンズ　特別顧問

川上浩司. 一般社団法人　日本病院薬剤師会学術委員会　特別委員

川上浩司. 特定非営利活動法人　臨床研究推進ネットワークジャパン　理事長

川上浩司. 特定非営利活動法人　MVC メディカルベンチャー会議　学術顧問

川上浩司. 特定非営利活動法人　日本高血圧学会　臨床試験に関わるありかた委員会

宮野公樹．文科省政策局「社会と科学」検討委員会

宮野公樹．公益財団法人サントリー文化財団「科学と社会研究会」委員（2014 年 2 月～現在）

仙石慎太郎．研究・技術計画学会　業務理事（平成 23 年 9 月 1 日～現在）

仙石慎太郎．特許庁　特許出願技術動向調査「幹細胞関連技術」委員会委員,（平成 25 年 8 月 1 日～平成 26 年 2 月 26 日）

仙石慎太郎．知的財産高等裁判所　専門委員（平成 25 年 4 月 1 日～現在）

仙石慎太郎．特定非営利活動法人京都ＳＭＩ　理事（平成 25 年 4 月 1 日～現在）

仙石慎太郎．一般社団法人日本知財学会　学会誌編集・企画担当委員（平成 25 年 11 月 1 日～現在）

仙石慎太郎．先端設備投資促進事業費補助金事務局評価委員会　委員（平成 25 年 4 月 1 日～平成 25 年 9 月 30 日）

仙石慎太郎．京都大学再生医科学研究所ヒトＥＳ細胞株樹立・分配事業検討委員会　委員（平成 25 年 4 月 1 日～現在）

中山健夫. 公益社団法人　日本医学放射線学会　画像診断ガイドライン委員会委員　平成 24 年 6 月 1 日～現在に至る

中山健夫．日本行動医学会　評議員平成 24 年 7 月 1 日～現在に至る

中山健夫．"特定非営利活動法人　日本暖和医療学会暖和医療ガイドライン委員会　補完代替医療ガイドライン改訂ＷＰＧ員"　平成 25 年 1 月 26 日～現在に至る

中山健夫. 公益財団法人先端医療振興財団　臨床研究情報センター倫理委員会委員　平成 25 年 4 月 1 日～現在に至る

中山健夫．健康と病いの語りディペックス・ジャパン　理事（副理事長）　平成 25 年 4 月 1 日～現在に至る

中山健夫．公益財団法人日本医療機能評価機構　部会員　平成 25 年 4 月 1 日～現在に至る

中山健夫．特定非営利活動法人 EBH 推進協議会　理事　平成 25 年 4 月 1 日～現在に至る

中山健夫．ＮＰＯ法人日本メディカルライター協会　理事　平成 25 年 4 月 1 日～現在に至る

中山健夫. 特定非営利活動法人医学中央雑誌刊行会　編集委員会委員　平成 25 年 4 月 1 日～現在に至る

中山健夫．山梨大学医学部　リエゾンアカデミー研究医養成プログラムの外部評価委員会委員　平成 25 年 4 月 1 日～現在に至る

中山健夫．日本褥瘡学会　倫理委員会委員　平成 25 年 7 月 1 日～現在に至る

中山健夫．"旭化成ファーマ株式会社臨床開発センター　日本語版 Modified Barthel Index 信頼性研究医学統計専門家"　平成 25 年 10 月 10 日～現在に至る

中山健夫．一般社団法人日本内視鏡外科学会　ガイドライン委員会特任講師　平成 25 年 11 月 1 日～現在に至る

中山健夫．一般社団法人日本薬剤疫学会　評議員　平成 25 年 11 月 16 日～現在に至る

中山健夫．特定非営利活動法人　日本暖和医療学会　緩和医療ガイドライン委員会委員　平成 25 年 12 月 24 日～現在に至る

中山健夫．一般社団法人日本循環器病予防学会　理事平成 26 年 4 月 1 日～現在に至る

中山健夫．一般社団法人日本腎臓学会　「抗癌化学療法に伴う腎障害のガイドライン作成委員会」委員平成 26 年 4 月 1 日～現在に至る

中山健夫. 日本多施設共同コーホート研究　研究モニタリング委員会委員　平成 26 年 4 月 1 日～現在に至る

中山健夫. 独立行政法人医薬品医療機器総合機構　専門委員　平成 26 年 4 月 1 日～現在に至る

中山健夫. 特定非営利活動法人　健康医療評価研究機構　倫理委員会委員長　平成 26 年 4 月 1 日～現在に至る

中山健夫. 一般社団法人日本肝臓学会　肝癌診療ガイドライン評価委員会アドバイザー　平成 26 年 4 月 10 日～現在に至る

中山健夫. 特定非営利活動法人医療ネットワーク支援セ　役員（理事）平成 26 年 5 月 1 日～現在に至る

中山健夫. スタートコム株式会社　e-ヘルスネット情報評価委員会委員 平成 26 年 6 月 12 日～現在に至る

中山健夫. 特定非営利活動法人　健康医療評価研究機構　学術諮問委員平成 26 年 4 月 1 日～現在に至る

中山健夫. 日本歯科大学大学院生命歯学研究科　客員教授　平成 26 年 4 月 1 日～現在に至る

小山田耕二. 日本学術会議連携会員

小山田耕二. 日本学術会議総合工学委員会委員

小山田耕二. 日本学術会議計算科学シミュレーションと工学設計分科会幹事

小山田耕二. 日本学術会議計算力学小委員会委員

小山田耕二. 日本学術会議ポストペタスケール高性能計算に資する可視化処理小委員会委員長

小山田耕二. 一般社団法人可視化情報学会学会理事・副会長

小山田耕二. 一般社団法人日本シミュレーション学会理事

小山田耕二. NPO 法人 CAE 懇話会理事

小山田耕二. IDE 大学協会近畿支部事業実施委員会委員

小山田耕二. 産業競争力懇談会シミュレーション応用による新材料設計手法研究会委員

Koji Koyamada, Journal of Visualization, Editors in Chief

Koji Koyamada, Journal of Advanced Simulation in Science and Engineering, Area Editor

Koji Koyamada, International Journal of Modeling, Simulation, and Scientific Computing, Editorial Board

久木元伸如. 日本バーチャルリアリティ学会　学会誌委員

久木元伸如. 芸術科学会関西支部支部長

アウトリーチ活動等

川上浩司. 2013.　病院薬局協議会/学術フォーラム. 病院薬局協議会 第 2809 号 pp23-24, 2013 年 10 月 24 日号.

古川俊治, 黒川達夫, 川上浩司. 2013.（座談会）保険薬局における後発品使用に関する注意点: 医療機関、メーカー、当局と情報共有を. 日経 DI 臨時増刊 pp6-8, 2013 年 8 月号.

川上浩司. 2013. マイクロ RNA による C 型肝炎ウイルス感染患者を対象とした臨床試験. 実験医学（vol31, No.8） pp2112, 2013 年 8 月号.

黒川達夫, 濱敏弘, 川上浩司. 2013. （座談会）保険薬局における後発品使用に関する注意点:疾患名、治療レジメンを把握することが薬剤師の第一歩. 日経 DI 臨時増刊 pp6-8, 2013 年 6 月号.

川上浩司. 大腸癌患者へのアスピリン投与の効果. medicina（医学書院）, vol.50 (6) pp1116-1117, 2013 年.

川上浩司 翻訳監修.2013. Pharmaceutical Engineering 誌日本語版（全 24 回掲載）Pharm Tech Japan, 2012 年－2013 年.

川上浩司. 2013. 医薬品産業のニューパラダイムにおける経営戦略（第 2 回 JMDC 経営戦略セミナー）. Medical Tribune 2013 年 3 月 7 日号.

川上浩司. 2013. PIK3CA 遺伝子変異と大腸がん患者の生存へのアスピリンの効果. 実験医学（vol31, No.3） pp413, 2013 年 2 月号.

川上浩司. 2013. ラジオ NIKKEI 病薬アワー「医療技術評価と薬剤疫学の最前線」講師. 2013 年 12 月 16 日.

川上浩司. 市販後安全性, 有効性評価ツールとしての Comparative Effectiveness Research. 第 34 回日本臨床薬理学会学術集会 座長・講演. 2013 年 12 月 5 日, 東京.

川上浩司. 2013. 臨床研究と医療の進歩, そして今後. 神戸大学医学部附属病院臨床研究推進セミナー講演, 2013 年 12 月 3 日, 神戸.

川上浩司. 2013. 米国の医療政策と医療情報を用いた臨床評価. 第 8 回医療の質・安全学会学術集会 講演, 2013 年 11 月 23 日, 東京.

川上浩司. 2013. 薬剤疫学・臨床疫学におけるデータベース研究の実例と今後. くすりの適正使用協議会薬剤疫学実践セミナー 講演, 2013 年 11 月 22 日, 横浜.

川上浩司. 2013.薬剤疫学・臨床疫学におけるデータベース研究の実例と今後. 日本薬剤疫学会第 19 回学術集会 ランチョンセミナー講演, 2013 年 11 月 16 日, 東京.

川上浩司（全体座長）. 2013. Japan Open Innovation – through acceleration of external collaboration - Sanofi 社主催. 2013 年 10 月 2 日, 東京.

川上浩司. 2013. 臨床疫学の潮流と医学の発展. 第 21 回日本血管生物学会学術集会 イブニングセミナー講演, 2013 年 9 月 27 日, 大阪.

川上浩司. 2013. ビッグデータと疫学が切り拓く新しい医療の展開. 大阪市都市型産業センター新産業創造推進ライフイノベーションセミナー 講演, 2013 年 9 月 26 日, 大阪.

川上浩司. 2013. 臨床研究、疫学研究の動向と医療技術・経済評価. 第 18 回日本糖尿病教育・看護学会学術集会 教育講演, 2013 年 9 月 23 日, 横浜.

川上浩司. 2013. 医療技術評価と薬剤疫学の最前線. 日本病院薬剤師会・病院薬局協議会学術フォーラム特別講演, 2013 年 9 月 20 日, 仙台.

川上浩司. 2013. ビッグデータと臨床疫学、薬剤疫学研究. 東京大学府附属病院耳鼻咽喉科医局セミナー講演, 2013 年 9 月 5 日, 東京.

川上浩司. 2013. 医療技術と薬剤の評価の国際動向と実例. 第 11 回日本臨床腫瘍学会学術集会 シンポジウム講演, 2013 年 8 月 31 日, 仙台.

川上浩司. 2013. ビッグデータを用いた臨床疫学の進歩の潮流. 国立がん研究センター研究所 講演, 2013 年 8 月 22 日, 東京.

川上浩司. 2013. Clinical research environment and clinical/pharmacoepidemiology. 第 19 回日本遺伝子治療学会学術集会 教育講演. 2013 年 7 月 6 日, 岡山.

川上浩司. 2013.　がんの患者中心研究の最前線. 第 17 回日本がん分子標的治療学会学術集会市民公開講座座長, 講演. 2013 年 6 月 15 日, 京都.

川上浩司. 2013.　医療機器開発環境と臨床研究. 第 88 回日本医療機器学会 シンポジウム講演, 2013 年 6 月 8 日, 横浜.

川上浩司. 2013.　臨床疫学とビッグデータが拓く、新しい医学研究の潮流と健康社会. 京都クオリア AGORA 講演, 2013 年 5 月 23 日, 京都.

川上浩司. 2013.　医学生のキャリアパスの新展開. 日本医学会総会学生フォーラム 特別講演, 2013 年 5 月 11 日, 京都.

川上浩司. 2013.　臨床面、経済面から見た抗がん剤医療評価の現状. 日本消化器病学会関東地方会 ランチョンセミナー講演, 2013 年 4 月 20 日, 東京.

川上浩司. 2013.臨床研究と医療技術評価の現状と未来. ファルマビジネスアカデミー講義, 2013 年 3 月 14 日, 東京.

川上浩司. 2013.　臨床研究の潮流と望まれる人材. 文部科学省関西ライフイノベーション戦略プロジェクト・医療におけるエビデンスユーザーからエビデンス創出者へ　講演, 2013 年 2 月 22 日, 神戸.

川上浩司. 2013.　医療機器の開発動向と規制. 医工連携人材セミナー 講演, 2013 年 1 月 26 日, 京都.

川上浩司. 2013.医療におけるアウトカムと経済評価. 日本糖尿病教育・看護協会 平成 24 年度研修会 特別講演, 2013 年 1 月 26 日, 京都.

川上浩司. 2013. FDA における薬事審査について. 文部科学省地域イノベーション戦略支援プログラム・久留米リサーチパーク薬事セミナー 講演, 2013 年 1 月 19 日, 福岡.

宮野公樹. 2014.「今日的な「メディア手法」の批判的考察～学問論の立場から個人活動を踏まえて～」(招待),「第一回　研究者メディア交流会」ヤバ研 meets メディアワークショップ　にて講演, 2014.03.02.

宮野公樹. 2014. 「今日的な『異分野融合』への問い～学際融合教育研究推進センターの活動紹介を添えて～」(招待), 大坂大学全学 FD 研究会　領域横断のための対話的方法論　基調講演 2014.03.05.

宮野公樹. 2014.「科学の客観の客観 ～異分野融合における政策哲学の視座から～」(招待)サントリー財団　「科学と社会」研究会講演.2014.04.05

宮野公樹. 2014.「より良い研究室内コミュニケーションづくり～調査結果と事例から～」(招待)静岡県立大学, ２月.

宮野公樹. 2013. 異分野融合交流会の紹介記事掲載, 京都新聞, 2013 年 9 月

宮野公樹. 2013. 分子生物学会　ScienceTalk ガチ議論　モデレータ（他のパネリスト : 総合科学技術会議原山議員、文科省斉藤室長、鈴木元参議委議員、Yahoo 執行役員他）, 読売新聞記事掲, (2013.12.16 14 面)

宮野公樹. 2013.「昨今の『異分野融合の物神化』を問い、政策論かつ学問論的な理論モデルの構築とそれを踏まえた分野融合実践場の創成に挑む」, Nature Japan, jobs にて特集記事掲載

カール・ベッカー. 2013. Lessons Learned from Disasters、ビクトリア市（カナダ）、IWGDDB PreConference、4/27/2013

カール・ベッカー. 2013. Predicting Caregiver Burnout、ビクトリア市（カナダ）、IWGDDB Conference、5/1/2013

カール・ベッカー．2013.「生老病死に対する日本人の経験智と自己決定」、京都大学品川センター、京都大品川セミナー第３６回、5/11/2013

カール・ベッカー. 2013. Why Redefining Death Requires Higher Education、Hallym University, Korea、Life and Death Studies、6/5/2013

カール・ベッカー. 2013.「日本の医療に不足しているもの」、横浜パシフィコ、日本皮膚科学会、6/14/2013

カール・ベッカー．2013.「日本人の死生観と癒し」、京都テルサ、第 23 回日本精神保健看護学会学市民講演、6/16/2013

カール・ベッカー．2013.「日本に於ける高齢化問題」、上越教育大学、いのち教育公開講演、6/27/2013

カール・ベッカー．2013.「死と終末期にどう向き合うか」、新潟癌センター、いのちをめぐる連続講演会、6/28/2013

カール・ベッカー．2013.「日本に於ける高齢化問題」、多治見病院、公開市民講演会、6/29/2013

カール・ベッカー．2013.「生と死を見つめて生きる」、一党圓大地の会、米原市大愚塾、7/14/2013

カール・ベッカー．2013.「SOC と幸福感」、京都大学経済学部、幸福研究会、7/22/2013

カール・ベッカー．2013.「日本人の死生観と癒し」、京都テルサ、精神保健看護学会京都大会、9/10/2013

カール・ベッカー．2013.「看護教育と悲嘆の癒し」、岡本第二病院（京都）、岡本第二病院倫理研修会、9/27/2013

カール・ベッカー．2013.「看護教育と悲嘆の癒しと倫理」、京都府看護協会、京都府看護協会教育会、9/28/2013

カール・ベッカー．2013.「どうする？あなたの看取り」、明石市市民フォーラム、明石市市民会館、10/26/2013

カール・ベッカー．2013.「ＳＯＣと燃え尽き」、キャンパスプラザ京都、ＳＯＣ看護研究会、11/9/2013

カール・ベッカー．2013.「死別悲嘆を越える日本人の知恵」、広島赤十字・原爆病院、広島赤十字・原爆病院、11/14/2013

カール・ベッカー．2013.「SOC, ACP, EOL」、芝蘭会館、日本老年医学会講演、11/16/2013

カール・ベッカー. 2013.「死から生を考える、上智大学尼崎キャンパス、『いのち』を考える」、11/29/2013

カール・ベッカー．2013.「異文化間で問われる医療者の死生観」、日本看護協会 JNA ホール、国際看護交流協会、11/30/2013

カール・ベッカー．2013.「9.11 からの回復過程」、稲盛記念館 3 階大ホール、こころの未来講演会、12/5/2013

カール・ベッカー．2013.「今を大切に生きる」、神戸国際学園大学、創立 50 周年記念講演、12/21/2013

カール・ベッカー．2013.「理想的な終焉とお寺の役割」、東本願寺研究所、定期研修会、1/9/2014

カール・ベッカー．2013.「燃え尽きを乗り越える医療倫理」、武田病院研修会、定期研修会、1/20/2014

カール・ベッカー．2013.「理想的な終焉とお宗教の役割」、天理大学おやさと研究所、定期研修会、2/25/2014

カール・ベッカー．2013.「理想的な終焉とお宗教の役割」、結城市民会館、定期研修会、3/29/2014

仙石慎太郎．2013. An Institutional Managerial Approach for Interdisciplinary Academic Research Projects.International Association for Management of Technology (IAMOT) Conference (Porto Alegre, Apr 2013) 2013/4/15

仙石慎太郎．2013．An Institutional Managerial Approach for Interdisciplinary Academic Research Projects, International Association for Management of Technology ， PICMET2013，2013/7/31.

仙石慎太郎. 2013. Heterogeneities and patterns of innovations in life sciences sector: the case of stem cells employing patent families data, Portland International Center for Management of Engineering and Technology ， PICMET2013，2013/7/31.

仙石慎太郎．2013．Application of bibliometric analysis .to market analysis, Portland International Center for Management of Engineering and Technology ， PICMET2013，PICMET，2013/7/31

仙石慎太郎．2013.「学際・融合プロジェクト・マネジメントと科学計量学」，研究・技術計画学会第 28 回年次学術大会 ， 研究・技術計画学会，2013/11/3

仙石慎太郎．2013.「異分野融合型研究拠点の研究開発マネジメントの実践に向けた取り組み」，研究・技術計画学会第 28 回年次学術大会 ， 研究・技術計画学会，2013/11/3

仙石慎太郎．2013.「創薬研究開発の価値形成プロセスの国際比較と評価」，研究・技術計画学会第 28 回年次学術大会，研究・技術計画学会，2013/11/3

仙石慎太郎．2013．博士人材成功する道，立命館大学『博士人材リーダー養成シンポジウム—大学院から未来のキャリアパスにつなげるために—』，立命館大学，2013/4/5

仙石慎太郎．2013.「学際・国際・産学連携のマネジメント～幹細胞のイノベーションを例として～」，平成 25 年度第 4 会分科会，研究・技術計画学会 IM（イノベーション・マネジメント）分科会，2013/6/28

仙石慎太郎．2013.「幹細胞科学技術：日本の挑戦と政策課題」，一橋大学イノベーション研究センター『産学連携に関するワークショップ:「産官学連携を問う」シーズとニーズの新たな結合を目指して』，一橋大学イノベーション研究センター，2013/8/28

仙石慎太郎．2013.「京大、幹細胞の輸送技術開発－産学連携プロを来月始動」，日刊工業新聞 2013/9/4

仙石慎太郎. 2013. New Policy Design for Biocluster Development in Japan ，International Workshop at the CEEJA: Regional Innovation Capability and Technology Transfer in Biotechnology Clusters, New ，Recipes in Japan and Europe? ，Centre européen d'études japonaises d'Alsace, 2013/9/19

仙石慎太郎．2013．京都大学　物質－細胞統合システム拠点（WPI-iCeMS).活動概要と学際・国際・産学連携，京都工業会，経営企画戦略会議 21, 10 月例会，京都工業会，2013/10/17

仙石慎太郎．2013.「博士号を取る時に考えること、取った後でできること 生命科学を学んだ人の人生設計，NAIST 博士・PhD セミナー，奈良先端科学技術大学院，2013/10/26

仙石慎太郎．2013.「幹細胞からみた再生医療の事業性.一細胞治療・再生医療展開の国際トレンドと日本の課題・展望—」，三井業際研究所，2013/10/30

仙石慎太郎．2013.「学術学際研究のための体系的な経営管理アプローチ」，第 14 回次世代医工学研究会次世代医工学研究会，2014/1/29

仙石慎太郎. 2013.「統合的イノベーション･マネジメント研究の提案:幹細胞分野での取り組みと成果」，WPI-iCeMS & NEXT & SMI 合同シンポジウム，「統合的イノベーション・マネジメント：幹細胞技術の学際・国際・産業展開の方策」（主催），京都大学物質-細胞統合システム拠点，2013/11/21

仙石慎太郎　他．2013.「再生医療に用いる幹細胞搬送容器の開発」，テレビ東京,産経新聞，読売新聞，

京都新聞，朝日新聞　他，2013/2/24.

中山健夫. 2013. エビデンスと診療ガイドライン 第 17 回日本気胸・嚢胞性肺疾患学会総会 第 17 回日本気胸・嚢胞性肺疾患学会総会 2013.9.7

中山健夫. 2013. 医師と患者の間にはどのような誤解やミスコミュニケーションが起きているのか、どのようにコミュニケーションすべきなのか ㈱マッキャンヘルスケアワールドワイドジャパン 2013.4.14

中山健夫. 2013. EBM と診療ガイドラインの今・これから :「エビデンス」と「コンセンサス」 第 28 回リサーチオンコロジーセミナー 岩手医科大学 2013.4.24

中山健夫. 2013. 一般病院における臨床医学研究 洛和会音羽病院 2013.5.15

中山健夫. 2013. Epidemiology Training course ＭＳＤ㈱ 2013.8.2

中山健夫. 2013. "健康情報学の挑戦 : リテラシー、コミュニケーションから共有価値へ" 大学学部研究会 ㈱ナガセ 2013.8.21

中山健夫. 2013. マイナンバー導入と医療費適正化の課題 第 10 回 21 世紀医療フォーラム代表世話人会 日経 BP 社２１世紀医療フォーラム事務局 2013.7.25

中山健夫. 2013. エビデンスとナラティブ ：これからの医療の手がかりとして 第２回 eBIM 研究会（一社）エビデンスに基づく統合医療研究会 2013.8.11

中山健夫. 2013. 産業衛生におけるエビデンスとコミュニケーション 産業医研修会 東京医科大学医師会 2013.10.19

中山健夫. 2013. 人間ドックへの期待 : エビデンスから共有価値へ 第 54 回日本人間ドック学会学術大会 第 54 回日本人間ドック学会学術大会 2013.8.29

中山健夫. 2013. ヘルスコミュニケーションについて 中外製薬㈱ 2013.9.27

中山健夫. 2013. 研究のデザインを考えよう 公衆衛生活動・研究論文の書き方研修 日本公衆衛生学会 2013.8.30

中山健夫. 2013. 健康情報を見極めるチカラ 大阪府栄養士会研究発表会 社団法人大阪府栄養士会 2014.3.1

中山健夫. 2013. 公益財団法人医療科学研究所 2013.9.10

中山健夫. 2013. 京大的知的好奇心学 兵庫県播磨高等学校向け遠隔講義 ㈲関西教育考学 2014.1.18

中山健夫. 2013. ヘルスコミュニケーションについて 中外製薬㈱ 2013.12.13

中山健夫. 2013. EBM と診療ガイドライン：これからの医療者に求められること 歯科医学教育セミナー 東京歯科大学 2013.12.25

中山健夫. 2014. 健康と医療の情報を読み解く：健康情報学入門 同志社大学商学部 2014.1.16

中山健夫. 2014. 医療ビッグデータの利活用 メディアセミナー アイ・エム・エス・ジャパン㈱　2014.2.6

中山健夫. 2014. 人間を対象とした研究：エシックスとインテグリティ 地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター 2014.1.31

中山健夫. 2013.　いまさら聞けない EBM の道 メディカル朝日 2013 年毎月

Koji Koyamada.　2014.　IEEE PacificVisualization2014 PacificVAST WorkShop “Exploration of the Close Interplay of Advanced Visualization Techniques and Sophisticated Visual Analytics Approaches”, 2014.3.4

小山田耕二．2013 年 4 月 26 日第 19 回東北 CAE 懇話会 10 周年記念大会オープンフォーラム「産官学連携による東北ものづくりの復興」パネリスト

小山田耕二．2013 年 8 月 23 日 IDE 大学セミナーパネル討論「３．１１と大学教育－大震災に学び教育の未来を拓くー」司会

小山田耕二．2013 年 12 月 3 日日本学術会議計算力学シンポジウムパネル討論「シミュレーションリテラシー」司会

大阪大学・京都大学
公共圏における科学技術
活動報告 2013

2014年10月10日発行

編集・発行　公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
〒560-0043　大阪府豊中市待兼山町1 - 16
TEL　06 - 6850 - 6111（大阪大学代表）
URL　http://stips.jp/
E-mail　stips-staff@cscd.osaka-u.ac.jp

STiPS 公共圏における
科学技術・教育研究拠点（STiPS）
Program for Education and Research on
Science and Technology in Public Sphere [STiPS]